874

昭和

昭和

湯古小說

晉子代氣質全

其隣著

913.52 上

氣質序

雲に昇るは。其鱗たて髮あるにより。鵠のよく天に翔る翅あるによれり。其身家業ゑ賢くとも。助る手代りなくして。獨擊皷は鳴ずねをよく出して。商物に利を得るは。その家の手代の働き一ッぞかし。手代又旦那になれば。又た其手代年功を積て。旦那になれり。次第送りの旦那に成て。我を抱し主人の心を辨て。恩を知るべし。手代の出世は已が勤にあり。私欲を專ら心がける者ハ。旦那の果には至りがたし。此善惡の手代氣質集て直に題号とせり。善人ハ見て笑ひ。惡人は見て呵らん。免し賜へ。

享保十五戌歲初春

作者其碩

花笑

国立国会図書館 29.7.22

336903

世間手代氣質

目錄

○出世の門開き掛る花煎餅　[illegible]の種人
手に掛て見る天秤輕[illegible]　親方念佛講の掛錢繋留た子飼の奉公人
手代共より小者が[illegible]を卷物店
○直段は我を折[illegible]の早い親方の耳
表向より[illegible]きらぬ茶湯道具矢橋の舟で糊に成た勢田の長咄し
古筆屋[illegible]を折た番頭が智惠袋
○旦那の[illegible]いされた夷講の饗應
[illegible]代判押こなした家内の支配當手にした形見はないて悔しの書置
[illegible]から讓りの金銀毎日持て廓通ひ
○[illegible]て内證は穴の[illegible]金山の損銀
女郎狂ひい命の洗濯のりの强異見旦那の門柱ねぢ直した番頭が力業
[illegible]手で粟抓たがる欲八の手とまり
[illegible]の投節死ざ止まい子息が惡性
合力の銀箱持くらべて重い主の恩顧れて引れぬ身請乘掛つた舟の中

共に輕い身上吹ば散風の神
を語り付る淨瑠璃い商の望姓
[illegible]子の土產に付てやる膏藥で延したる銀後生願ひの小間物や商ひ下
[illegible]手の長談議口三味線引掛けて頼む宿ばいりの奉加帳
○三、[illegible]中連判推察な後家の影沙汰
一盃呑といはねば腹がふくれぬ上戸米市の思入上るど下るど身代の
甲乙僧庵の精進料理水くさい傍罪附會
○主從の中角のない丸鏡みくもらぬ番頭
醉狂は身の瑕をかくして出す禁酒の神文疑ひの深い井戸皮我見るい心
の懺悔いひ合せて主の爲に身を捨る鍛に剛の者
○燒が反へ廻る刀屋の手代が無分別
付智惠は身の毒飲込で當る主の討胞衣持て知らぬ夜道ころりと成百
の捨賃心からの野伏り我と瓜を晒屋の若い者
○巧い深い智惠の海底の知ぬ人の心
血氣の若い者一旦い色に出花の茶屋狂ひ難風に船ハ返る嫁入道具三
下り半の分散狂氣と成し根元は親方に損を掛商

○詐金を頭で取先斗町の借座敷
賀茂川を手池に粋の好東山の景芝居[illegible]賑かな新規の呉服店
奉公は捨ひ歩行紙屑籠に一盃の[illegible]

○旦那を尻に敷火燵温かな[illegible]懐
傍輩の評判のさ高に成[illegible]体天秤の響貧者の耳に入相の金の無
心虎の威を借狐の[illegible]質化

○金銀廻りのよい[illegible]の金長者
旦那の物で[illegible]はすみ切た丸山の仕拂親の佗言は下手な柿木成次第
育た子[illegible]後樂きしめの見へる我世の盛

○合力の[illegible]かゝたが悪い疱瘡顔
[illegible]か利を得て虚空に上る兩替賀撰をゞ嫁入が延過た娘の脊長
[illegible]にてん〳〵と鄰てゐる女形の一指
[illegible]打堅めた兩家の身代
銀の入手詰の將棋指向ひに内證談合再ひ榮る家の寶は白鼠の忠
夫婦相生の松枝巣茂る繁昌の門

錄終

世間手代氣質

作者 其[illegible]

[illegible]領 多田

○ 出世の門開き掛る花煎餅い幸の種

夫士農工商の四民共に家來の働きによつて其主人名を取り世に知るゝ事多し分て商人の手代い頼をし旦那を富貴にし又旦那を倒す此善惡の二ッと主人の行跡とつかはるゝ手代の性根次第ぞかし武家い万に行儀正しく其家の掟嚴しければ主從の禮儀そこねず君臣の道よく叶へり町人は掟を第一にそれ〳〵の家業によつて主の前にて片肌ぬぎ旦那詞を加くれどいそがしければ返答もせず我儘につとむれ共商ひの道をさかせれば金をもうけてさいわいがへば暇居をへだて三ッ指をついて主人を執して物いいぬとても商ひに精さへ出せば主從の禮儀を改める事もなくまた内儀などがさげん取て手代に追從いたるゝやうに町人の人の家の風俗自墜落から發つて大事の主人を輕しめ中ぐうにする心より夜遊びに仕過してたゝぬかゝの悪根性千里一トはねの自分の買物を仕出し利德はかくして去こだめ損い親方にかづく肝心の宿賃もはらる時分に親請人に難儀をかけ一生首をあげずして朽果る身の終皆以主人を心安く思ふから仕損じ其身の怨となる事世にいくたりか見へけるいづれよいもの

そちが
人のつらひ
やう〳〵
さうでふい
めぎぐ
ころひ

りやうけん
ふりまはせぬ
そなたと見れば
しれまぜうが
めぐ
ぶんぶ
ある
ぞ
むりぢや
さうふ

は稀にして、年寄たる手代は、我ためになる事をしてれく、若手代は惡所つかひが張て來て、主人の德をつけず、酒も飲ず、夜あるきもせぬ律儀なる者は、何事もうちばにかまへて、商ひ手廣ふせぬ故に、目立ほどの感狀もなく、損もかけず、毒にも藥にもならず、せんしやうつねの如く、秀たる働きもなくて、跡から來た若手代共にれしてなされても、無念など思ふ心もないものは、宿へはいりても、借錢もせねば、欲ものはさず、一生女夫口を喰てとをる迄なり、又大氣なる手代は、人よりかさにかゝつて、商ひ高もして、取旦那にもうけてあてがふ事もあれど、生得の大氣が万事にわたりて、心もとなく、旦那の代判させてしやうに、金もかゝされず、さるほどに、人の家にすぐれてよい手代といふものは、稀にして、主たる人の氣骨のれるゝ時ぞかし、爰に十市の里に、又作として、小百性あり、律儀者にて、人中あて物さへいはず、闇から牽出す牛さへ持ずして、角屋作りのあさましく住なし、盆正月も麥ばかりにて、手にかけて作りはすれど、米といふものを喰ず、旦に星をいたゞき、野に出て、鋤鍬の禿程働けど、五十余迄貧しく暮しぬ、女房ハ麻布を織のべ、足曳の大和機をたて、南受の窓の本に、壹腰せし、夢に、天秤に金の籐の花咲たゝる露の口へ入ルと見て、懷妊しぬ、ほどなく、男子をもうけ、金の籐の花を夢見てもうけし子なればとて、籐助と呼て、夫婦五十過ての子めづらしく、珊瑚の珠と、秘藏してそだてけるに、智惠才覺常の嬰兒にかれ、強か

に、とは、是なるべし、天性て、耕作の道を嫌ひ、年貢の勘定時分には、庄屋の方へかけもゐ、十露盤れくを見ならひ、習ずして、地算を覺、手跡よき人の書捨をもろふて來て、手本として、砂手習に、夜をあかし、九ッの歳に、二親に暇乞ふて、京へのぼる人について、都六條の姨をたよりにたづねゆき、奉公のゝぞみ、いまだ九ッといひ、破れ布子のよごれし一ッにて、姿見ぐるしければ、よい人の許へはつかはしがたく、寺内の一文菓子屋へつかはしおきぬ、此所にて、花煎餅、與米にて、大判小判の形を作りて、小店へ持てまはらせ、賣せけるに、時めく、兩替屋の見世なる、正直の小判、共を、籐助菓子箱かたけながらつくゝ見て、幼心に思ふは、奉公は、主取りが第一なるべし、毎日小判形の菓子はすれど、在所からのぼつて、三年ゐれどつゐに、生た小判はさてれき、一歩とは、ふものも見た事なし、年をかさね、奉公して、親方ほどに成てから、が、高のしれた身代と、見侮り、何ぞよい主を、限て、一ト奉公し、末にて、出世すべき、心さゑ、十二の年には、發明過てれそろしかりき、毎日菓子箱持て、小店へれろしにゆくついでに、京中の棟高き家々に、氣をつけて、見て通りしに、上京の美濃屋信德といふ、呉服屋、近年の仕出し、分限、また、手代を抱、手廣く、商ひしける程に、古來より、仕似せの、呉服店、此美の屋が、新店に、賣ひしがれて、割符仕舞の店をそくに、買取、自分の、出店となし、諸國へ、何軒が、美濃屋といふ、緩簾をひるがへ、て、名をとりぬ、籐助、此見のやをしのば、ゑく、思

ひ何とそ爰へ奉公したきと心さしはあれと三年口の上にてあたる身なれば仕着の一ッもなく在所よりの古布と扉の破れし太布の帷子より外となく當分身の廻り見くるしければ誰取ついてやつてやらふといふ人なくあはれさつはりとした布子ひとつをるほどの銀あなほしやと思ふ折ふし菓子屋の親方藤助をよびて念佛講の錢をかりしを返しに鳥目壹貫文持せてやりけるを是天のあたへと道へ出ての出來分別かならず主人の物を盜にあらずしはらく御斷なきにかり請まする追付足利そへて御返濟申べしと主の方をむいて口の中にて斷申すぐにねんごろなる洗濯屋の嘱方へ持行此錢にて木綿布子ひとつ拵らへて賜はれと願み出來ると其儘床髮ゆひに髮月代をさつはりとしてもらひ直ふ彼美濃屋へ行て店前につくばいでつちと入ませぬかと自身其身のありつきをねがへば木の手代きせるくはへながらふり賣の奉公人は此家に置た事なしそれも物喰ぬ奉公人ならふいてもやらふとたのれも近き頃迄でつちにて鼻垂なから豆腐花抽の小買物につかはれ内ゐては灰吹すてたりきせるの掃除に在所の土氣をみがき今手代並ゐ口を利ばとてちいさいものを見こなしたが云分藤助此手代が顔を見て れ前も子共の時は内かたで物まはらずに御奉公つとめられましたかと打こめむ扨も江舶なり悴子と相手にならずとかく大身の旦那の内へは引なくては至りかたし頃は春の

彼岸の入りとて盛物の爲に煎餅賣の聲を聞て主の禪門珠數つまぐり乍ら店へ立出煎餅賣をよひ込一文に二枚づゝのを内佛壇の盛物に一枚かはれけるがかゝる大身代にて佛に五文のもり物する程の始末しやなれば讀手まかせには焦たり欠たり賣屑をつきつけてゆかふも知ず同じ錢にてゐよいを撰て取へし爰へ入物持てこいと張藤の煎餅入を取よせ目金かけてあれのこれのと撰るゝ内にあやまつて店より下へ入物を落され煎餅微塵になりければ禪門驚き性我なれば堪忍めされ其代に煎餅はとらずに十枚代の五文ゐやるぞとあれば賣手大きに氣色を損し今朝片荷に四百枚入て來た煎餅かやうに粉にくたかれてゐ宿へかへられず四百枚代貳百文つかいされと中々かんにんする氣色見へねば手代共色々と詫て五十から百迄增て詫れといかなく四百枚の代下されねば歸らぬかゝる御大身にて其日過の煎べい賣を粉になさるゝかと聞入ねば禪門重る貳百三百の錢ていとはね共思ひもうけもせぬ事に何百枚有か知ぬ煎餅代出してはねたられて錢出去たと近所て笑れてゐ三のやが一ふんが立ず粉に成た煎餅此方にとめず性我代に百文やらふと手代共が了簡するがむりかと角めたつていはるれとかく四百枚代をと詰議やまず通りの人ゐ店先に立とゞまつて見れば手代其外聞を思ひあたまをかいて貳百やつていなしたかれと親方が合点せられぬ錢を出しかたくて

摩やまたてゝいさかひけるを藤助最前から見てゐて粉に成た煎餅の數ほど代物をつかいは
れ破たる分を御取なさるれば御買なされた同然双方にいひぶんのない事なるあとつぶやく
を禪門聞てどこの躬玄や此粉に成た煎餅の數がどふして知るもの玄や百枚あつたを四百枚
あるといひかけするやら玄れずいひかけにあふて錢やつては店のひけになるゆへ繼の錢な
れど出さぬといはるゝをうれは數の高はつい知まする事片荷にまんそくな破ぬ煎べいがど
されば一枚目にかけて御覽成れたとへば一枚の目壹匁ごされはゆの粉にくだけた煎べい共
を取集め惣目をかけ御覽なさるゝと目が百目あれば百枚貳百目あれば貳百枚つゐ知まず事
しやにともどらしさんに申せば詫くひそらせし大勢の手代共舌をまきて片荷のまんそくな
せんべい一枚取て掛て見れば一枚壹匁一分あり頓て破たる粉共を取さらへてかけて見るに
目百六十五匁あり是ゆやぢ破たせんべと高が百五十枚惣目が証據一文に二枚の算用にまて
七十五文ほたすれば出入ないと粉の煎餅を取て七十五文つかいしけるに煎餅屋の親仁さふ
も詞なく錢請取て百文のほびの時きけばよいものと明てくやしきせんへ箱かたけて歸りぬ
禪門藤助が頓智を感じ直に其日から十五年切て御家に召つかはれける是そ鬼の煎べい嚙や
うにめつきゝと立身する嘉端なるべし

○直段に我を折人參きゝの早い親方の耳

近年分限になり人の樣子を見るに其家によき手代ありて是等が働き故ゆ家と買ならへ商買
の外に大分の借し銀にていよ〳〵富貴になれる人もあればとかく其家の旦那よりゐ手代が
第一と家來を頼みに思へば親代から家榮たる人いつとなく内藏空大名といひ立られ互にか
しかりもならず久しき家に傳はる諸道具を夜市に出すはれしき事ではないか〳〵と賣立ら
れ年々の茶湯振舞に出親の代に人も見知て眼前恥をさらすも其主の奢ばかりにてはなく手
代共が取潰してあたら家退轉しぬ是を思へば手代の科ばかりにはあらず其家の旦那の覺悟
あしく人を見知ぬ故ぞかし聞べき時の算用をしておき能囃子に打入物見遊山に出かけ銀手
形の詮議もなゝに伴頭の手代がいひぶんと慥に印判押といへば味吟もせずつゐれしてやり
旦那故の鼻の下長きを見てとり手代共が取倒す事なれば主人たる者平生油斷なく帳面を見
て算用あいを度々きけばたのづから手ぐりまくりの銀廻しもならず商買ばかりに打かゝり
てひとつも私なく家も治り家來も無事に主從共ゐ身の爲なり抑美濃屋の信德といへるは親
より終五貫目に古家一軒もらひ手代小者食燒女主從四人にて十年か間要もむかへず家職を
大事につとめ自身呉服物をかたけ得意廻りして段々もうけ溜て今何万兩有か有う金の高も

知ぬ程内藏五ッに詰て手代さへ京の店に三十余人諸國の出店かけては百人にあまる手代を抱へ去年六十一の本封に法事して惣頭三七に町儀ヲ勤させ面屋を渡しながら隱居もせずに世詰をやかれた左の手には珠數の粒をつまぐり右の手には十露盤の粒をはぢき口にと念佛を唱へて目には籠の下の薪のくべやう燈心の太細に氣をつけずいぶん費なる事にハ一錢もつかはれず旦那寺の普請の入用又は寺々の奉加などにハ日比嗇に似やハずめつきりと金を出され我若い時から貿置物をして段々拍子よく金銀をもうけ來り今諸人にもちひられ何に不足なき身となれば是から未來の佛の買置をして來世ものくのぞく樂みを極る處へゆくがてんとかく地獄も極樂も錢次第此世ばかりのあの世迄も持ねばならぬ金銀かならず爲末にする事なかれ何に成ても此一物なくては浮世にすめる甲斐となしかまへて汝等主にしてやる奉公と思ふへからず勤る年季の中は金持になる修行をすると心得て万事に氣をつけ働くべし商ひの道を知れる人のうかノ〳〵と身を持くづし貧乏神と跡さして寢るハ口惜き事にあらずやと惣手代にいひ聞されしは尤の事ぞかしかゝる親方につかとるゝはよい長者の師匠を持て不斷金儲の指南にあづかる同然にて其家につとめる手代共の仕合なり中にも三ばんめの五兵衛といふ若ハ者商ひの道に疎からずぬかりのない者と見へ老にむす子三七頭を上

させず後に來たる手代共にさばかせて五兵衛にと店守りさせ置しを信德見られ三七に向ひ多くの中にて一器量ある五兵衛を新參者より劣りに極めたる役もなしに置事は主人の目のあかぬといふもの惣して汝が人のつかひやうを見るにひとへゐ薪を積に等く新參者を古參の者より上へあくるハ木棚に薪をつむに異ならず當功をなゑ其家に久しき者は一ト志に懇切に見たて役をいひ付目をかけてつかふへき事なるに新參の若い者はめづらしさに近よせ古き手代の者を思ふて一言も我氣にくはぬ事をいふ者ハ疎遠にする事大きなる誤りなり旦那の心にあひてさげんのよいとはいひよきものにて常年はいつもより商ひ事薄ければ御始末をなされませ御慰に仕入てござらふと風呂がよいと申さば早速御入り遊ばしませ旦那一人御入りなされねば大勢の下々いつ迄も入ル事ならずぬるうならぬやうゐひたと炭をついで夜の更る迄風呂をしませず待あとせて居此費毎日何ほど〳〵いふ事なくゑかも火の用心迄あしく御用なくば早ふ夜もれ休みなされませ御主人一人御休みなされねば靈所をしまれず女共でつち迄ふせりず所々に火をともしてれります夜か更ればれのづから朝寢なされて家内の者が朝食もすまして大かたとしり本もしまふ時分に又旦那の朝御膳まいると二度三度燒たてる木柴の費をねばしめして平生の御行儀をなをされませなど〳〵いふ者はかならず氣にゐ

とぬものなり常に我氣をなぐさめる事をいふ者は不忠の手代と思ふべし五兵衛は無役あし
て店に埋らせ醫者にあらず日外我等傷寒を煩ひ邪氣去て草外あれば人參を一分づゝ入られ
よと醫者の玄庵いへれし故五兵衛よびて人參の小賣所へゆき能人參一匁調へて參れと銀七
匁渡せしあ二條の木藥屋あて朝鮮の大折人參一兩二百十匁にてとゝのへ歸りし故肝がつぶ
れ身がいひ付し能人參は買ずして高直成人參しかも一兩求めて來る事不届の至りと以の外
に呵りし時其近答はせずして武士の矢橋のわたり近く共いそがばまわれ勢田の長橋と連歌
師宗長のよみし歌を吟じてそらうそふいてゐる故主の物いふ返答ハせずして歌所か親方を
馬鹿にそるあしらひとはよ〳〵いかれば勿体ない何しに御主を馬鹿にいたさん只今の古歌
が慮外なから私の返答でござります勢田の馬駕籠の賃が高ふとて始末で八文にて矢橋の乘
合船にのりひゑ落しに大涙打かけ舟をもり上ケもり下生たる心地はなく命のれ玄さに大神
宮樣へさま〳〵の願だて諸佛諸神への祈誓わづかの中にあの世此世の堺を見て年を寄せや
う〳〵命からゞゝにて着しけるが風のない時と一時いらぬ渡玄舟に三時もかゝりあまの命
をひろひ草津にても其まゝ舟にのりし心にて目くるめき中々一足もひかれねば終にかまはは
ず駕籠にのつてしかも常なれば水口へは八ッ時分に着をやう〳〵石部迄着て思はぬ大錢を

ついひ戻つてからも其時に頭をかけた太々神樂を御供神十二文で御願申て代參りの道のつ
かひ一貫文渡し跡から跡迄の物入皆勢田迄のがごちん百五六十を始末して八文の渡しにの
りしからの雜儀物入賃ても二ッなさ命とたすかりしが其身の仕合憚りなから始末と申も物
により時による御命の大事の場に始末なさるゝは矢橋の舟にめさるゝ同然御本腹が五日遲
ければ五百目や七百目の費にもあかずよい人參を用ひられ一日もはやく御快然なさるれば
大分の德有る事を分別いたし極上の人參を買て參りましかは長引を損と申事を考て二百十
文出玄たが私の始末でござると申せ玄此器量心の廣き大勢の頭に置ても秀兼ぬ者なれば大
阪の店の番頭をさすべし扱あれにれる藤助めい猿松のやうな顏なれど元服したりわつばれ
主に金もうけてあてがひさふな器量見せれば目をかけてつかふへ玄とをすが大勢つかはる
ゝ主人の目金たがはず藤助年を重ぬるに隨ひ商ひの道鍛錬し古き手代共よりはよく商ひを
玄たりし故若輩なれ共江戸店の番頭職を象り武州へ下り絹布に限らず江戸中にはやりと見
る程の物を京より取よせ唯金もうけの事のみ工夫せり或時熟なる所の古筆屏風を見て是よ
り思ひ付て扇子の地に古筆の短尺色紙のもやうを出せ都のあふぎやより數万本取よせ古筆
あふぎといふて賣廣めて大分利を得たるを傍輩の手代共藤助に向ひいひけるは呉服商賣が

扇子賣といふ不相應外なる商ひなされては呉服店の邪魔にも成べければ重てからは御無用と、留ければ愚なる咎の申ぶん町人は知行は得ず何商ひにて成共金銀をもうくる思案が第一賣人の人に增ゞて商ひせんと油斷なく拵と武士の戰場に出て高名せんと心がくるが同じとにて我は鎗の家なれば鎗より外はつかはぬとて川向ひにひかへゐる敵を鎗がとゞかぬとて見守りて手ゐるへきや其時は鎗をすてゝ弓を以て射落し手柄をするが侍の肝心商人も其如く何で成共金をもうけて旦那へ奉るが手代の高名必絹布一ト通りに腦て外によい金もうけの事をうつかりと余所に見てゐたもうなと猶々心を以て古帷子の役に立ぬを莨草切やうに細ませ木綿にちやんを引て此粉をかけて見てさま〳〵の色を拵和國羅紗と名付て安たばこ入地に賣て何はとゝなく銀をもうけのばせければ主人悅びの余りに三百兩褒美として賜ぬ扨店ゐ碁將棋の盤を拵出日が暮ると十ヶ所にも火をともさせ手代共に碁將棋をうたせ隨分内々てい面々好た事を慰ゐして必他所へ遊びに出らるゝなと夜に入と一寸外へ出されぬ共内の面白さに出る者もなく月に六日銘々請取の賣先きの帳を吟味し商ひ多くせし者には一貫目に五匁づゝのほうびを出しければ利生ある番頭と惣手代共滿足ゑて面々勵て精を出し店治つてゑかも商ひ次第にかさゝ親方の悅ひ是ゑ寶の白鼠福神の御秘藏隱れ蓑かくれ

の星の仕合ゑかし

○旦那の盛手くはされた夷講の報應

傾城の起請と皆偽りと笑ふ人こそれかしけれかならず商ひ上手の女郎よい得意を取にかさぬ爲の紙商人の利徳を取ながらせいもん損がゆきますといふに同じ品こそかれ商ひ口の空誓文年中溜置て十月廿日にさらりと拂ふて仕舞目出たいとかいふ惠美須講諸商人万事をや先て我分限に應しさま〳〵の魚鳥をとゝのへ一家あつまり酒をくみかはし日比始末なる旦那も大氣を出し銀ゐかまはず鯛を求て手代共を客となして報應けり美濃屋の京の伴頭十兵衛は一器量有る男にて段々功を積て今京店の頭を持大勢の手代引廻しけるが今日夷講の座上になをり一盃さげんに傍輩の若い者共にむかひいづれも我を見ならひ給へ今此店にて信德といふ旦那の名はいはずして同商賣の衆中はいふに及す金銀の出入する兩替等迄十兵衛殿々と用ひられ金銀の調達も我等が印判一ッにて時の間に千貫ゝの事も埒の明ゝ世間から我を目當にする故なれば旦那にも夷衆の次には我等を馳走せらるゝが無理でもなしと我を忘れてとまんしけるを信德次の間にゐて聞ゐゝより氣はやき禪門腹にすへかね座敷へつか〳〵と出正座ゐゐる十兵衛が頬を握り拳を以て七ッ八ッ去たゝかにくらはし狐虎の威

をかる身のほどをしらぬ過言今十兵衛と世間の人に用ひさするは皆我威光の影なりれのれが印判にて千貫目の調達がならば此三の屋の家を離れて借りて見よ三の屋信德といふ門柱丈夫に立て有るゆへにれのれが印判のさく事を自分の力量でとゝのへまんざら主人の身代をれのれ一人して立てやるやうなゆひぶん今日より此家を出て其働きがならバ去て見よと以の外の立腹十兵衛も大勢の傍輩の中にて生類をくはされし事無念なれ共親方なれば是非なく赤面して座敷の興は覺果て傍輩出入の者も十兵衛が旦那の御影にて威を震ふあまりわ我を忘れて過言は法外ながら舊功なしたる手代をでつち同然に大勢の中にて生類をくいされし親方も立となげなしと主從共よそしらぬ十兵衛れのれが法外なる過言の事ハ思はずして是よハ旦那に恨ふかく惡念さざしけるがつく〳〵思案して却是は身の爲にはさいハ以向後より此美濃屋の家督をうばひ取我物にせんと惡心を發しける京江戸大阪三ヶ津はいふにれよばす諸國の店まで十兵衛が軍配指引を去て來りし身なれば兼てそろ〳〵と私欲の巧の手がゝりを工夫しけり惣じて大商入店まかせれく手代に心をふれさせては家の破滅の基ぞかしされば信德若い時から家業に油斷なく精を出し世の費ひとつもせず一生の中仇錢つかはず万に氣をつけ其身一代に三千貫目もうけ出し今かくあまたの手代をれきならへて諸

事をさばかせ面屋を一子三七にわたし其身奢ず分限相應の樂みをきはめ若い時の辛勞を取かへされぬ是そ人間の身の持やうなりたとへば一万貫目持たればとて老後迄其身をつかひ氣をくらして世を渡る人一生は夢の世とは知ず何か益あらじかぎりある命信德其年の時雨ふる頃より煩ひ出去次第に重りて京中の名醫見放去すでに末期の水今ゞ生死の海蛤貝にて入けるに咽をとれさず一家一門下々迄手足を握り枕本に立寄是々西方極樂へたゞ一道にでされ安いとて地獄の方へ駕籠からずに蓮臺に乘て金佛と成ゐへとず、めければ信德中眼に見ひらき我すでに行年七十五才人間の壽命五十年と定め見れば引殘て廿五年の生德是に閻とい ふ三十日宛の利をもつて見れば凡三十年ぢかふ年齡のもうけありて今日浮世の帳面さらりと消て閻魔の筆に付かゆる心算用きはゞければ何をか思ひ殘す事なし昔より長者二代なしといへば大事の所ゞ三七郎此書置と見て此通りに一生身を守り家職に油斷する事なかれ佛事作善に人集して費なる造作かならず無用と是を此世のいひれさめにくるしみもなく往生せられ殘る財寶三七一人丸取にして廿五年より生れつきたる長者なり四十九日過て一門手代共殘らずあつめて今日遺言狀を披くと披露すれば親類出入手代共迄それ〳〵の形見わけの心當してひらくをまち兼しに遺言狀にゝ何の事なく一生の間我心に好た事をせず

隨分氣にすかぬ事をいたすへし又はしき物を買ずおしき物を賣べし是を考守る時は平生の身持委しく書置に及ばず此内に隱れり三七參ル信德ト斗にて所務分形見の僉議は曾てなく欲心にかたづをのんでゐた一門家來あきれはて手前のよき親類も錢銀の便りにならぬ物と今迄こぼせし涙をやめて信德を見限り家々に歸りぬ三七は生れながらの長者なれば惜きといふ事をしらず一家へ義理を思ひ〻書置に形見わけのない事を淺ましく思ひとや遺言狀をそむき一家一門へ緣の濃薄さに隨ひそれ〳〵に滿足するほどに金子小袖をわけて賦り京の番頭十兵衛に室町の五間口の家に銀三十貫目そへてとらせ江戸番頭藤助に四條の四間口の屋敷に二十貫目つけてつかはし其外の手代共新古の差別を立て相應に形見を渡しければ親御とも格別の心ざしひとへゐ清盛入道の嫡子重盛にれとらぬ今の代の賢人さまと讃そやして皆悅び昔に增りて出入人しげく不斷賑ふ事かぎりなし親父とちがひ風俗ゆたかに心至り上京のよい衆とまじりよい事見るゐしたかひ親の文盲無藝なりしをわさましく思ひ万の藝を嗜まず破損にもむかぬ座敷を打くづして當世風に建直し庭の物好にさま〳〵の木石をあつめ數寄屋をたて〻雪の朝に釜をたきらせ茶の友を招きて樂みける上を學ぶ下とて手代共も万の藝にかゝつて十露盤れく事疎略になり先代よりは格別至り今の旦那の心いき天性

のよい衆親旦那此家をもとめられし時園の有しを商人の家に園い貧乏の面箱とて即坐に打潰し其跡へ借蔵を建られ借賃取てもうけの口切とうれしがられし田夫さと今の若代の物好の何から何迄花車なるを思へば鴻が臚とは大抵百性がれ公家衆産だとやいふべきと下々感してむさやうにはめけり此時番頭の十兵衛は形見にもらひし室町の家に呉服店を出し其身は旦那につとめながら絹布鍛錬の若い者を置てそろ〳〵親方の得意をせつて取旦那の絹布類より一割切もやすく賣ければゐのつから十兵衛が見せはんトやうして主人の店は前代より商ひうすくなれと雖氣をつくる者もなくけふは伊勢講あて東山へと傍輩五六人ともしたて〻打連れば芝居見に行手代もあり見せには新規の二才上りの手代とでつち四五人蝶箱のかげにてよゝがるた打て居て縮緬一卷買たいと店先へ來ればござりませぬとかるた半に立が邪厂とてない〳〵といふていなせば日〻に店さびしうなれど主なしの家同然になつてやくたいもなふなりゆきぬ旦那三七と奢のあまりに島原の太夫職中興のもろこしにかしり名殘れしきは朱雀の細道とうたふたる朝露ふみ初次第につのりて年中の紋日ひとうしてつとめ如悅曉雲千トなどいふ法師武者の手垂の大皷持共が御発の塵をとり〳〵そやしたて太大臣とのはされ末社いいふに及ず揚屋夫婦下々もかゆい所へ手の行やうに算用なしにぐは

ぢり〳〵とうれしがらせ太夫を手に入れ自慢して外の男をせきて金づくめにして自由にし今の聘節にはりあふ買手あらばれそらくは威勢くらべ十万日にてもたしかにうけ込此大臣第一若ふして達者で銀持て親がなふて情がふかふて去ぬふなふて一年中隙であけ錢ぬ先錢渡して買まする時々の小袖ぬ太夫好みにまかせ手前店へ申つかはして進せる是程丈夫な客にはくぬしやも眠たくと夜食時分迄つとめやつたがよいとづ亭主も氣を付てずいぶん初物を料理して喰しやれ杓子であてがふ大臣とはちがふべし誰にれそる〳〵事もなく此里の金万両でも我宿で拂ふ男は我等が外にはござるまいと思ふまゝ成る事いふわも金が敵の世渡り皆御尤にして承り親のもうけためられし内藏の金銀わけもない遊興につかひくづしけるに此時異見すべき手代を始め出入の者も眞有る者はなくて哆ふくとらぬが損と分別して羽織をかり取にするやら家請を賴みながら聾の無心を申やら喧嘩する秘傳書に墨舟が添狀つけて質物に預け小判十両むりどりにするやら内外の者に取ひしかれ次第に内証に穴明て千丈の堤も螻蟻の穴よりもれる水に滅する如く長者といはれ去身代今に淺ましく成る三の屋と笑止がるものはなくて若代の手代が異見せぬを町内にて叱もとはり〳〵

○　堀抜て内証に穴の明金山の損銀

古人の語に姪麗美色は人を惑し易しとおれば若い者の慎へきは色の道なり美濃屋三七親が死なれてむつかしい者なく金銀には事か、ぬ身日夜の遊興に内証の不埒成を見極め番頭の十兵衛はよい引所と我家へ移り出入を止て寄くる人にはかく親方の身上あしく成は知れた事故數度異見いたしたれど聞入なく剩參るなと出入をとめられれのづから參りもいたさぬが私あの家へ一ト月參らずば忽ち家はつぶれまず死なれ去親旦那へ面目なけれとせふ事がでざらぬと人間よい忠臣ふりの述懷至極の佞人とやいふへき既に分散に極り家屋敷急あ賣たいと町内への披露盛衰の世とはいひなからいとしや親父は念しやにて我子の代に家普請に手のかからぬやうにとて石井筒に鐵釣瓶軒口の銅樋をかけ屋ね板も椹木の節なしを手前にて耗させ諸事念を入置れしに一子の魂わるさに人の物に成事面々心得べき事なりと年寄共會所にてふと〳〵れけるすでに十九貫五百目に望人有て帳切の日を定むる所へ江戸番頭藤助夜を日について馳のぼり主人の家へも入ず旅裝束其まゝにて宿老衆の方へ參り親旦那の位牌所を他の手へ渡すはいかにしても無念の至り何とぞ御約束の買主へ御斷仰られ私に旦那家を買させて下さるべき此上五百目三百目増銀出して成共賴ミ上るとのそみければ年寄も尤と買主へ斷いふて藤助にかはせける京本家かくの仕合なれは江戸の店も去冬仕舞

大勢の手代共も外の主取してかたづき藤助一人踏留まつて今迄の店とは各別繼なる店に美濃屋とはふ暖簾をのこし傍輩の中にて物に成へき手代をなつけ此小店にのこしれき今一度元の三のやに立なをして親旦那の黄泉の無念をとらし奉んらと一心に思ひ込此度分散まて濟まける領せ方へ此存念をはひ聞せ頼みければ其志を感し何にてもせり物是迄の通りに事はかゝさぬと頼もしういひければ藤助恍ひ本家へはいり若旦那三七の不斷の絹物を木綿物にきせかへさせ手代並にしてなし万事につかひ親方の得意を取し十兵衛が今の賣先の得意方を取戻さんと三七に態トよこれし布子に時ならぬ生絹の羽織木綿島の下袴をきせいつかふたやら云れぬ髪付其ま、にして藤助同道して得意方へ廻り段々の譯をいふてなげきければ先々にて三七が体を見てれいとしや今迄洗濯物さへめさ、りし身の時代につれて素布子にて我々共に手をつかねてのれ頼みと見る人憐なべての人最負をして切一尺袖口一トかけの事も藤助方へいひ來れば十兵衛方の賣物より少しづゝやすくしてつかはしけるはどにそろ〳〵見せ賑ひしを十兵衛聞てにつくい藤助めか仕形と一切の絹類卷物端物袖口半襟等迄一割づゝ損する合点代付を板行にして普く得意方へ配りければ藤助方の番頭五兵衛と云手代是を聞てはりあひなれは十兵衛方一割損して賣出さば此方からも二割損して賣

崩すへしと氣象を出せば藤助制して尤商人のならひにて得意をせりおとすべき爲に當座は損をして賣事もありといへども今度は當分ばかりの事にあらず殊に諸方を引請ての事なれば二割づゝ損してい大分の事なり其上十兵衛は是迄私欲をかまへ貯たる銀高凡二百貫目余りとふぼにたり手前い總四十貫目にたらぬ我等が年々の溜銀此度家代に廿貫目出ま殘つて廿貫目を以て此新店を取立んと思ふ所存なりむかしとちがひ分散してしまはれま旦那の跡なれば銀五百目とかしてくる、人なし然れば十兵衛い二百貫目望姓太夫にして年中一歩の利相にしても廿四貫目納る内證此方は高廿貫目の身代一年の歩高やう〳〵二貫四百目の少利を以て大敵の十兵衛と商ひはりやひの戯ひい損のみ多くして利を得る事かたかるべま細元手にてはりやひたてして追たをされては臍を噛て悔てもかへらぬ事かく銀もうける時にて何はど工夫しても元手の太夫なる十兵衛発には終にとしてとられんと藤助是にのみ心を勞しいかにもして十兵衛が店をのつとらんと晝夜肺肝を惱しけり五兵衛又藤助にいへると元手の多少によつて十兵衛と張合の商ひならぬとい口惜さ御言葉然らば手前を丈夫にしての上に損銀かまはず手廣ふ商ひして十兵衛方を賣ひしぐ思召ならば究竟の事あり元來拙者が親はかくれもない金山師生國多田にて飄軍まぶの盛し時分三形の何某と相仕ふて大分

の金をもうけられし故に幼少より私金山一ト通りと親共に秘密を承り置て岩を掘ずして其中の箔の有無を見極め中隠し藏ゆり三七殿御身没落の節大阪の出店を預り居まが根城の京の御家屋し故是非なく預りの店を仕廻何とぞ一度主人の御身上を取立んと鍛錬せし道なれば西國へ行もむき金山を見立歸りせめて十貫目元手があれば一年の中に慥に百貫目はもうける金のつるを見置たれ共こなた殿には江戸よりのぼりいなされず年をむなしうえて延引せり元來銀の廿貫目の中我等へ十貫目のしめ當年中に百貫目と云銀を馬に負せ能歸り此店を丈夫にいたし進せんとすゝめけれ共藤助さらに承引せされば五兵衛大きに立腹し器量のない大將其心にては中々此店を持ふふせはなされまじ迎も埒の明ぬこなたに隨ひ我もともにはたづらに朽果んは無念の至り我に等き親方につかへて金山で大儲をして見せ申さんと内にても有とか店先にて藤助五兵衛等に大聲上ていさかひければ近所から何事ぞと立寄程にいひつのり其日五兵衛は暇取て直に宿へ歸り藤助への頻當に十兵衛店へかけ込こなたより頼んで成共在付藤助が商ひの邪魔をして思ひ知せんと腹の立まゝ十兵衛方に勤ゐる若い者にかたれば十兵衛が惣領十太郎とて今年廿一年親に似てそう身欲でかため氣血の若盛に祇園石垣は思ひもよらず五條坂の茶屋の盛さへふみし事もなく七ッの年かさ初に桃、

色の絹の褌姨小路の姨より送られしを今に其一節にて埒を明るほどの者なれば成人にえたがひ世帶に功を經て亀井筭などは中くらに巾着の口をゑめ世智賢い商人を腰ゐさげる程を猿利根なませ者劇夕の菜の物にする鰭目黒も目にかけてねたんをし斗芋も百を幾ほど數のをゝて買夢にも十露盤をわすれずだゝ金をもうける事にのみ聞耳を立しに今度五兵衛藤助と口論して隙取て出しも金山の大儲ある事を聞入ぬから藤助が器量のないを見限り出しと聞やいなや今時何商ひをしても一倍に成事はなし十貫目入て百貫目もうける金山の噂いかにしても耳寄なりと頻に欲心ささし夜更てひとり五兵衛宿へひそかに行内談するに聞に増るうまいせんさく先十貫目試ゐ五兵衛ゐ持せ西國の見立し金山へやつて願ひを立させ掘子下財をゐまた抱堀かけるに見分とちがひ堀入て底より涌水つよく此水かいはさでは肝心の金の緒に取つかれねば立廻といふ物百丁斗搾ゆる其雑用に百兩斗さし下し給へと京へのはや飛脚既に十貫目入置ぬれば是をせずしては十貫目銀のすたるをれえみ百兩を下せばそれから何に入かに入とひたと金をいひのぼす程に親にかくして是迄廿四五貫目切込今いゝ糸ばならず親十兵衛にかくといへば今迄卒示のない悴子是程ゐ思ひ入るからは見こんゞ所あるものならんと仕かゝらぬさきてそなれ廿五貫目とも入たる上い利を得る迄金を入

と見よと段々持かけ前後二千兩余り打こんでゐり出ゑたは岩壁堅い身代を大欲から朽の入しもひとつは旦那の目を掠め私欲をせゑ主人の罰當つて碎た十兵衛が門柱聞人笑止なといはずゑて其筈と罰あてがいするもよく〳〵人に憎まれゑ故どのしたゝ奉公人は主人のまなこをぬかず正道につとむれば天の惠みにあへりとはへり

○色里の投節死さ止まい子息か惡性

鏐の釜の堀出ゑ今の世にはなかりき富貴にしても苦あり貧賤に去ても樂みあり一切の人間應せぬ分限をねがひ身を滅亡す例其數をしらず鬱濃屋十兵衛主人の方にて番頭をせゑ時は旦那の光りにて賢ふ見へ人も思案をかりに來て明智ともいはれし十兵衛欲より心の鏡くもり主の目をくらまし賣先きの直段と店の牒面とは一割づゝちがへ置たとへば十匁に賣たる物を旦那方の牒には九匁と付置て年中一割づゝ中にて取こゝ大分銀を貯一軒の店の主と成て一旦分限者と高ぶりしも主の罰と其身の大欲から思はぬ金山の損からするはどの事諸事左前になりて表面は張て見せれど內証は明殼万不手廻しになりし時五兵衛藤助方へ來り御計略にて十兵衛が持かた免ゑ店路城に間なし爰にてこそれぼしゑす如くに十兵衛が商ひ得意のこゝろず此方へ引つけ申と明ければ珍重〳〵さらば此節此方からも絹布類の代付の反

行を町々へ賦れと三年待て配けるに十兵衛方へ聞合に行ゑ以前とちがひ代物自由ならざれば何をとひにやりてもない〳〵にあいそつかゑて皆藤助店へあつまりけるも十兵衛が元手の丈夫なるを減させんとて大欲のひつはつた十兵衛父子が心底を見すへ五兵衛を回忠の者にゑて埒もあかぬ金山にかゝらせん爲五兵衛と仕組ての計略と後に知て皆人我をれりぬそれより次第に店はんじやうして信德世盛の時にかわらず大丈夫なる身上に成て會醫の恥辱をもゝぎゑと藤助范蠡が心になつて悅びけり三七は藤助が影によつてかくむかしの身になりしを我智惠才覺にて取直せしやうに廣言吐て又島原へ出かけるを藤助引付きびしく異見すれば家來の身として推參千万身がいろ狂ひは天性なればやめらぬ重て異見がましき事いはゞ此家を追出すと眼に角たて逆ふ成て樞から出をれすゑかけ藤助今はせんかたなく主從の禮儀を思ひ是迄之執していはされ共さふ横に車と出られては直に此家之立難し此家屋敷は身共が銀にて買取再び店を出した元手も拙者が銀子こなたの物とていけしが手が一粒もあつたか久しき此家を他人の手へわたずかむねんさに買とりむかしの如く立てなとしこなたの性脉さへよくばゆく〳〵は讓つて親御の御遠忌を永くといせゑせゑふとなして晝夜工夫に肺肝をくるしめ寢食を忘れて商賣のみふ心をつくし御主人の職敵の十兵衛を計略を以

て店を沒落させ今是程ゐ固たる呉服店をこなたに又仕崩されては過もき給ふ信德公へ不忠になれば今日よりこなたを此家にねきます事は決してならず早々何方へも出てゆかるべし去かし此家屋敷代と取付の元手銀と合て四十貫目は自分の貯銀とは申せ共親旦那より申請たる銀なれば貴公へ進上仕る此銀を以てずいぶん一生喰つゝいてもくやうになされよと藏より四十貫目出して渡しければ此心さしを尤もと感じてせずして主人をたゝ退出さふといふたとて出て行ふか四十貫では安いものなれど此家にねれば異見きくがうるさゝに出てやるぞとまだ恩にきせて件の四十貫目を男共にもたせ所こそあれ島原ちかくに居つも月夜の宇八といふ太鼓持が窩屋敷を其日にのりて爰へ立退今日から異見をする手代はなき世界我まゝといふ大臣と又通ひ出す惡性者死なさやむまいと廓でうたふなげぶしも此三七への當言ならんとねかしかりき十兵衛親子い藤助が計畧を喰て不埒なる金山にて大分の損をしそれを取かへさんと新田事にかゝりてやらぬ芝居の銀元に加はり買證物に下りを得するはどの事にあたまをちやつかれ家財のこらず皆になして出生なれば小栗柄といふ所に兼て田地を買置ぬれば此節幸の引籠所と親子共に仕馴ぬ鍬鋤持ての荒仕事中々力に叶ひかたくつゐにい持あぐみてわづかの田地を賣て捨其銀持ても當分何をと商ひの思ひつきなく天性

邪なる種姓を顯さ字治にゆき平等院の底の面是なる芝の上に莚打敷座をくみて紙子ぬきすて身のなるとてい天狗顔もしとて曲物ゐ一から十五迄の木札を入右の手に錐を持往來の人を詐しむす子を相取にこしらへ愚なる人の錢をとりしが博奕業とて追放られむかしい澤山に思ひし小判色なる山吹の瀬にかはりゆく身の果かなしくいかなる因果の種をまきの嶋も朝霧におぼろ〳〵として是非をわかぬ界境船と橋とは有なからわたりかねたる世の中に住甲斐なき身を耻ず坂本に少々の去るべをたづねて無理にそこへにじり込大津海道に出て親子水入ずの相肩の駕籠かき見知れる人もあるに喰ぬかかな去く土手又の言葉をたぼえ乘手を口さきでのせて酒の一盃も飲ふとかゝれど今時の乘手賢くきのふの旦那殿の咄去せぬさきに駕籠舁相手にきのふ乘たがこの者と心よいもの共で札の辻から三條の大橋迄百でかつたが見かけより輕い旦那殿じや百と申たれど八十ゐ負て去んせませふと辛勞仕なかゝ十六文まけたはあつとれ男氣な奴茶屋で旦那ひとつ上りませと十二文で茶碗に一盃酒迄ふるまふたがむかしとちがひ今の駕籠かきはきたなびれた事をいはず日の岡でかへた時れりしなに增をやらふといへば賤い駕籠かきこそいたせ極めの外に錢をもらひませうはづかないとこちらから壁訴訟することを乘手から先手をくとされ小腹たてゝ死人かたげにして一さん

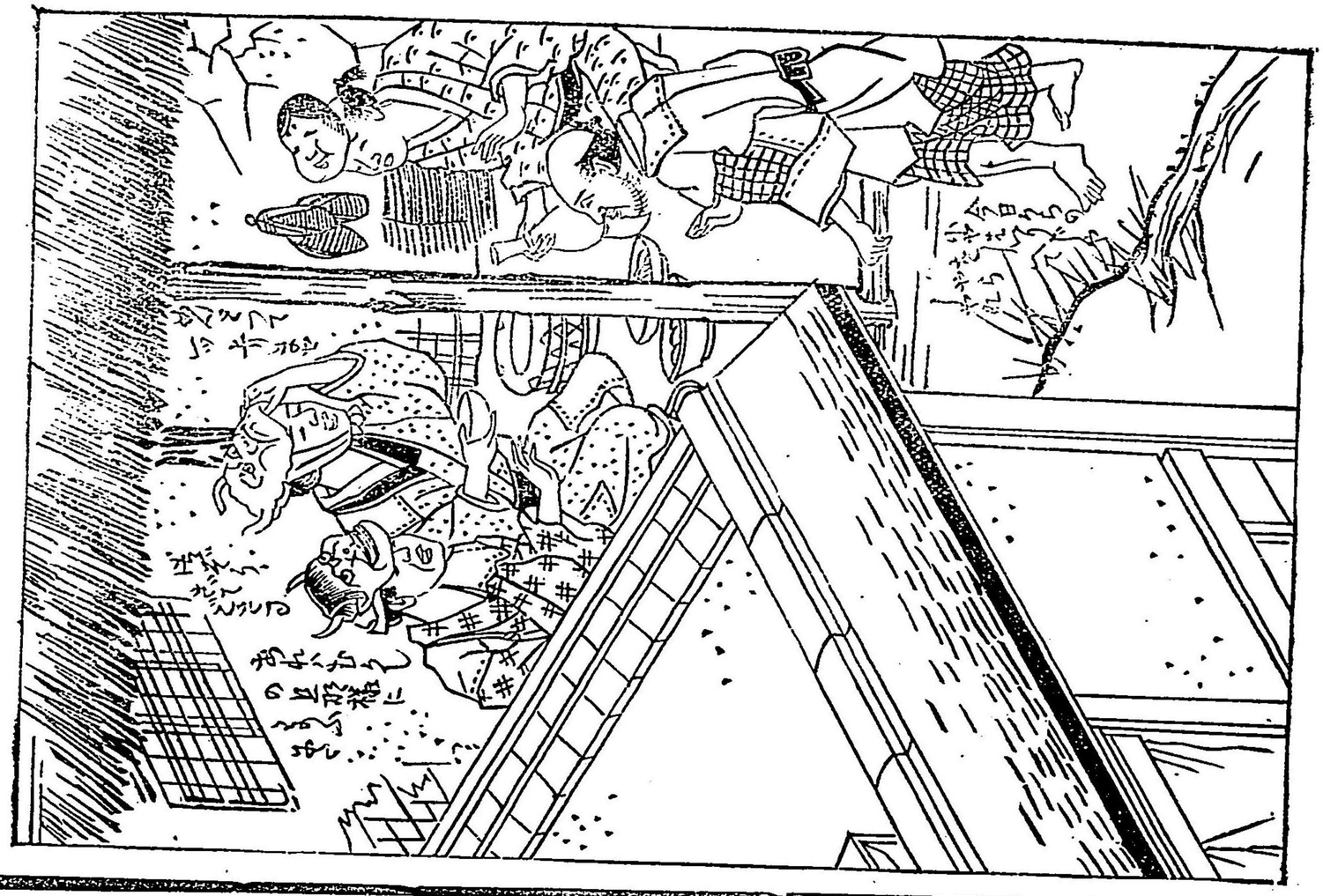
に走井でれろ玄底豆を踏出していでかれぬと錢とつて打明て歸りぬ仕付ぬ事に肩を腥し商賣かいてさま〳〵と脂を出し骨をれしまで身を粉に働き此世からの地獄鬼の面着て破れし木綿一枚て寒空に風の神れくるへ〳〵と大皷た、き立て門々をやかましういふて廻り囉ひ淄の米袋をさけて我住小屋へ歸ればきのふから隣の小屋をかりて來た男も風の神の思ひつきふて是も心は鬼の面角をふりたて嵐はげ敷いにこりや何の罰々と大鼓提て戻り互に面を着ながら今から隣同志諸事心やすくかたりませふと時宜しあふ身ぶり余所から見てのれかしさ其身ゐ成ては此姿か口過と思へばはづかしさふに見へず道から買てきたと見へてちいさい徳利に酒つめて我樂みかとれもへば何に成ても義理いかゝれず宿酒の心にて鬼の面の十兵衛親子をよび入いざ先ッ面をれとりなされてゆるりとでされとゆへば御亭主にも面をれとりなされいや私は祝儀ででされば此ま、といふをそれはれ堅いひらにとらしやれと互に面をぬぎて顔見合せふ前は古主の若旦那三七殿かこりや十兵衛れや子かと主從あされて空を見る雪助の寄合面々此体になりし咄しつきぬ所へ小屋中間の年寄分の男來りて昨日かりて來た人はてなたか十兵衛殿ちかづきさふな新規の貰ひならひなら敬てやらしやれ世間に咳氣がはやれば風の神の思ひ付一段よかろ若い程に定て色事て親の勘當度々て詫言の綱

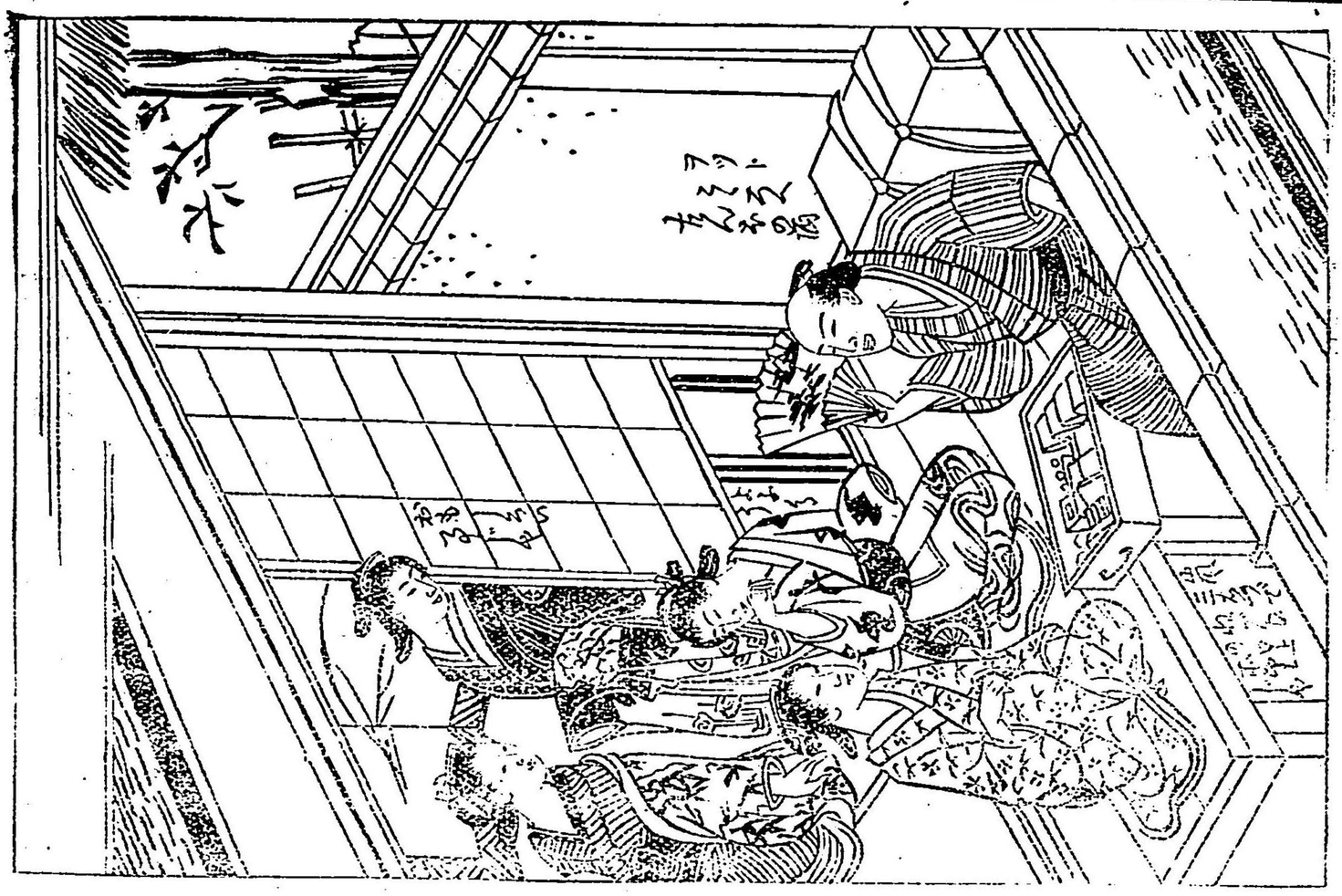
もされて小屋ばいりと存る中間に腹の中からの米もらひと一人もでさらぬかふいふ我等からか主人の氣にちがひ親一門に見かきられてたゞずむかたなく此小屋へはいつて十年西國順禮姿て口を喰て通りまず主を倒してはは何をしてもいでのあがらぬものでござる身共は中京の漆屋の子飼にて十五年の年功元服するとゝや色漆と心さしあたまから嶋原へ出かけ金の威光て天神を自由自在に廻しあてもない金銀つかふから主人の金をせしめと心かけ人の見ぬ間にすり漆付てはなれぬ惡根性はとなく暮の勘定たゞず百両の不足親請人の世話あて五十兩にて詫言すみなじとて了管して又立歸り勸しが此度の難儀生を殺てもわすれはせじと色事にふつゝと慾り女を見てい班猫はどにれそれあれはどにもなをるものかと旦那夫婦もあんどせられ今と氣遣なく大阪から吉野へ買物ゐ金二百兩手渡して下されける世の中に人の身をそこなふは色に增たる物とあら玄と慾はて伏見の下りふねにて乘相の人が東島の色噂さくもれろろしく耳ふさいで珠數取出し光明眞言口の中にて唱居る所へ間屋の若い者綿子の蒲團かたげ來て我乘し次の間へ敬て歸れば其あとから丸目たにて顔つゝみ黑縮緬に葉付の菊の縫紋所躰よくふねに乘移りし時川風袷を上久米の仙が通をうしなひし白き内股しのばしく是はどにてりたる身にも見たさ心は凡夫のかなしさかたふけし笠をあけ

て見るかと女がこちらむくとが因果の出相がしら互に見合せやわこなさんは漆屋の七二殿じやないがいなそちや島原の八雲か是は〳〵と持たる珠數のたま〳〵あふより昔蒔捨々戀菓の種めくゝ世間を仕切去荷物取のけひとつになれば女に付てきた男むつかしい顔付して面白い咄半を雲殿おなじゝさふなが先遠慮してもらひたいこなたは近い頃よい大臣に請出され下屋敷にござりしが大臣は親か、りにて此奢故勘當こなたにも隙が出て親御の方へ戻られし折から親父殿欠落者の請に立れ百五十兩金がなければ籠舎めさるゝ所を身共が聞付此度新町の扇風方へ五年百五十兩ですまさきのふ金子持てのぼりかゝりに小判盤して親御の難を救ふて今日こなたを難渋へつれ下るに船中かゝる間夫が付て始終つとめの邪摩なと出來ては肝煎の此肝の八兵衛が立ませぬと又荷物にて仕切するを八雲悲去く聞んす通りたま〳〵廓の苦患とのがれた身がとつ樣故に又地獄へ落ますと膝にもたれて噺た涙が六根へしみ渡りむしやうに不便に成て來て色道にてりたる身を忘れきづかひすな百五十兩身が出去てやつて又の勤はさせぬ潛上でいひはせぬと腰成打がへより五十兩包四ッならべて見すれべ女郎と嬉しく八兵衛をん聞んす通じや扇風方とふそ斷いふて下さんせと願めば現ゐ貳百兩を見入し八兵衛欲心發り身共は御存知の通勤する女郎衆の肝煎をして過ル男惣じて廓のならひ身の代渡し親判取ては其日から扇風抱の女郎あなたが深い中で二度の勸させてやるまいと思召すなら此雲殿を身請なされて進せられ扇風が聞れたら足元見て三百兩といいれふがそこらは我等も情知くつわ手前は欲取なし百五十兩に五十兩の增を付て二百兩つかはぎれとこんな肝煎する男なれはぬけめなく中で五十兩の金の草鞋はくがてん色々詞をつくして百九十兩渡して埒明牧方へ船のつくを嬉しく船頭に斷わりゐふて八兵衛に暇ごひして女郎を連て上りはたごやに一宿我物にして樂しが能々思へは歸るへき所なく八目にかゝらぬ片田舎へ身をかくし殘りす十兩ありぎりの榮花も間なくちり〳〵ゐ女郎と離れ乎と身とに成て二度の仕そんし行へき所なく今此小屋にはいり女郎買の大臣が此躰にくだらくや順禮哥でやう〳〵けふを送るなり慨むへきは色の道と懺悔がてらの問ず語り聞て三七もそれゐちがはぬ不孝者と思ふから胸をいため忽血を吐死ければ是は〳〵と驚き思ひもよらぬ無常の風の神死骸を野邊へかくるは〳〵

○　得意方を語り付る淨瑠璃い商の望姓

香餌のもとには懸魚あり重賞の家には死夫ありといへばすいぶん下人に仕着もよく去て着せ時々心づけも去てねんごろに目をかけてとらせばれのづから恩を思ふて身を捨しまず働





くものなり事さら店をまかせれく手代には氣をつけ滿足がるやうにせねば何かにつけて德のゆくやうにい働かぬものぞかし昔奥筋の武家につかへて三百石の身上聊の仕損しあつて御暇出妻子をつれて少々の所縁を便りに上かたへのぼり月代のばして孔子顔にかへて名も武休と改めける世に住ば夢ゐも遊ふ暇なく万金丹合せてけふをくらしぬ寄年の口れしく奉公の望も絶て七十歳にて頭を丸め其後は丸腰に成て武士の顔付さもせず木綿物の上に縮緬の單物羽織三十年に成編笠を被れバれのつから日かげ者腫物切疵の膏藥をねり出して是を賣て姿も心も町人になりぬ内儀も歴々の息女なりしがむかしを捨て朝夕の米をのしき手足も自然と荒たる宿に是非もなき平月を送る中に男子二人賣藥のかげにて樂々と育十七十五になりければ迎も腹の中から町人に交つた子共なれば武士は成まじと細き事ながら是迄賣たる膏藥から延したる銀十貫目を五貫目づゝわけて土產銀として五條邊の衣屋へ兄をやり弟を小間物屋へつかはし兄弟共に養子にやりて夫婦ともなく世をさりぬ兄弟共になまかにつとめ養父に孝をつくしれのが家職に油斷なく子飼の手代兩人兩家にあつて目をかけてつかひけるに衣屋の番頭せし源六といへる若い者は男を嗜み髮を油でいた先布子もさつぱりとしたを着て浮るり小歌芝居の役者のこはいろをうつし口拍子きいて飛あがりの浮氣者異見すれど常座ばかりにてとかくやめず間かあれば雪隱を淨るりの稽古場にして不斷道行揃の本と懷中夜でつちをつかひにやるも私か參つてまいらふとかけ出す、、、、、をさりとてまめな男じやと思へば月夜より闇を悅ふ樣子は役者の眞似の稽古の心がけ浮氣なれ共一錢算用相にちがひなくも色かまし所へ行躰も見へねば後あは咲もせずして亭主の留主には内儀などがこまづけ所望して慰みけり又弟の小間物屋の若い者は用さへなければ近所の寺に談義さへあれば聽聞し其心から朝晩も西を向てしばらくの看經若い者には稀な信者とはいひながら起るから寢る迄浮世がかつた咄もせず極樂寺の少べの御說法は殊勝な事じやとのく佛法の事のミいろひくらしぬ毎日小間物箱をかたげて得意方を廻るにれはくは奥へ呼こまれて櫛笄御齒黑揚枝疊紙など女中打寄それよ是よと取々に見ける中芝居はどれがはやりぞ万太夫には何をするヲとゝはるゝ時私い生れついてしばゐが嫌ひて役者の名さへ存ぜませぬ大寺の談義へれ參りなされませ女中がたの御聞なされねばなゝぬ御說法女は外面似菩薩内心如夜叉と佛の御說なされて れ前がたのやうに髮容をうつくしうなされ顔に白粉口に紅見た所ははさつも同じ事なれど心が夜叉の樣なによつて男より浮み雜いと有る事でございますれば常に御顔より心をたしなまれましたが女中の第一と扇子にて箱の

ふたた、いてなんと難有い事ではございませぬかと談義の口うつしをすぐにやれば當前女中の氣にあはぬ事なれば二本入筭も一本買たばこ入も取さしてどれも氣に入ぬとつき出されて次第に商ひ薄くなりぬ兄弟の旦那面々の所の手代の失を咄相て袈裟衣を請取にやれば歴々の寺がたて淨るり小哥しばゐの嗜して小僧納所を浮氣にすると遠國からすはられし物がたい和尚に嫌れ重てから余の手代を指こせと行き〳〵の寺がたゐていやがられ大分商ひの邪魔誤はすれど浮氣がやまぬときのぞくのあたまをかいて語れば弟聞て分別を其元の其浮氣な手代の源六と此方の談義好の長八めと入かへたらば両家共に今迄より商ひを仕出さふと存る此方の小間物商ひに談義咄い揚屋の亭主が持齊する樣なものばうきよ商賣に不相應こなたの衣の家業に淨るり役者のまねすると出家の下着に紅裏つげるやうな物で似合ませぬ両人に此譯をいひ聞せ請狀仕かへ向後互に置かへまふせと兄弟内談しめて二人の手代にいひ渡し取かへて賣に出しければ小間物屋は行さき〳〵て今迄の長八といちがふて氣輕なよい人ぞやとどこでも源六〳〵ともてはやされて各別商ひの高をそてはゝ成銀もうけをして歸りぬ又長八は寺がたで咄ぞかゐふて今迄の浮氣者とは大分のちがひ親方の仕合と一段得意の寺々の氣に入りけり是を思へばつかふ主人の目利の入さふな物ぞかゐ小間物屋の

親方夫婦は今迄賣先の女中がたに嫌れ商ひせずに歸りし長八と今賣增て金もうけて戻る源六も同し如くに手代ともいはるゝ者に夜は小者が割かれて置た割木をすけさせ下女共に風呂の水を汲入させ長八は律義なまめなものでいひ付もせぬに朝晩の夜着蒲團の上げ落し迄ゐて万にまかな事に心が付たがそちに大空で濃がゐるとやかましい淨るりのさいもんのと適々は面白いが毎夜は耳が酸成る長八よりちと商ひを仕增て來るを鼻にかけ戻つて食も給仕人がなけりや喰ぬやうにぞると亭主より内儀が氣ゐ入ぬ顔付是より源六心それて思案し主人夫婦の前へ出在所から文を越ましたが今月始つかたに兄貴か果まして親父をはごくむものなければ旦那樣へ御斷申て暇もらひ歸つて野を働いて養ふてくれといふて越ましたと余義なくいひかけ隙を取得意方を廻り主人むたい成事を申されますによつて此度暇を願ひましたれば年季の中に隙を取が曲事として着がへをれさへ身すがらにて出されました日頃御目下さるゝ御得意樣がたの御影を以て何とぞ小間物商ひ仕ります程れ金をれかしなされと下さりませぞふて興がたゐ御入用の物なれば商ひ物を免して引取ゐ遊ばすやうにはんにどんくさい願ひなれどれうば樣よいやうに仰上られて下んせいなと山本かもんがこわいろでいへばれ物師侍女走り出源六殿迚の事に嵐三右エ門が身ぶりて願ひの口上が所望〳〵ナ

ット心得たんぼの酒あたゝかひれ細ひなれどれ情ぶかい女郎さまかたなればねがふをいやといなれつしやりませぬとつよさりとは其まゝ嵐じやといふうるにつゐて奥さま娘さまたい所ぢかく御出なきれ源六あすの晩い廿六夜待する宵から來てたも私どものやうなつぢ打同然の藝を御ひいきとて來てくれなゐの紅屋の御隱居樣で御町衆を夜ぶのまひにする取持に參れと夕べもしらりと夜明の烏丸をぼしやの嫁御樣の帶のいはゐの祝儀酒盛に國太夫節の夕霧藤屋の伊左工門樣の與さまは參ると盞でも源六來たがさいもん〳〵といかいふ好で今朝から今迄さいもんによそへて私が此度の頼ゆ上奉るのボンボとやりかけましたれば御意に參りて金五兩旦那樣や御手代衆へかくしてやらふとの御意と口上三味線にのつてハテ三兩や五兩の事ならそなたの事じやほどに旦那樣にはふたとはやとはれつしやるまいと方々の内儀がたへ此調子で持て參れば奥かた娘御が見せへかくして二兩三兩れ物師は黒繻子の帶持て出て庄陰で是をそちでやふ成と金にして此度の役にと渡せば侍女のりんも在所の親の所へやる心當の包銀を内証から借やら家々にて奉加集る故にして廿兩かり出しになひ箱拵へ小間物仕込迄行し貿先を廻れば親方聞て源六所へ付屆ケして主の得意方へ參るまいとの札取て主人より賣手てを廻せどこちや源六がをがへば今かられじやんなと行先々にてかゝされば つるに源六方へしてとられぬ親のた自身廻らず手代任せゐ貿しに出す商ひは其廻る手代に得意がなじむ故主人のまゝにもならぬ物なれば手代に情深ふ目をかけてつかいねば必自立の思ひ立できる物なり心得べしと小間屋の亭主いへり

○手代中源判推察な若後家の陰沙汰

數万軒の家々いづれか表付さは替らねど内證のよさあしある難波の浦は日本第一の大湊諸商人氣がさに陽氣盛に春めきさわたる淀屋橋を越て中の島の氣色雲靜にまて風たゝ遊山船の幕も小雨にぬれてしつぽりと女交りに三味線さへしめり直の高下なく万の相場も定まりて米市の人立もなく若い者共けふのさびしさに懸硯に寄添て十露盤枕として義太夫が七行の大字をひらき尻を扣きて拍子を取ぬれの段程れもしろさはなしと内へも聞へる程の騒すこしと旦那の手前もいゞかれかしと思へば其家の主は去々年死なれ此後家今年廿八にして器量すぐれて色白く打見には廿斗の容人の好る當流の女なれば誰も妻にむかへたかれど改家の心ざしなく當年十一に成龜之助といふ一子をあはれみ夫の遺言を守り人の疑はぬはどに髮切模樣なしの着物に細き帶して艶顔に紅粉絶て琴をやゝて十露盤をはぢきならひ損傷そかんがへ町儀其外表面の用は番頭に勤させ物見遊山もやめて亡夫の忌日に寺へさへ參ら

れぬは今時の寺まいりの若後家に浮名の立ぬはなきを思ひやりて敢居より外へ出す行儀堅く大勢の手代を引廻されける商賣はなくて米質をとり又は家質町借シの慥成をかしつけ其外借藏廻船を持て昔より上下三十人口ゆるりと暮されし身上なりしが近き頃死なれし旦那在世の時新町狂ひの費に費なる金銀をつかひすて其身も酒婬の二ツの不養生にて果られ以前より内証ふ手廻しになりし所を後家の身にて請取何とぞ世間へ尾を見せずに相續えたき心ざしあまた多き手代の中に番頭の太郎兵衛二番目の手代次郎兵衛三番め三郎兵衛とていづれも發明にして一思案有る手代共竊に奥の間へ取り籠り後家御と供に額を合せて談合したりしが番頭ワキの次郎兵衛は奉公に疎略もなく隨分主の爲に是迄も働き手跡十露盤に達て男なれ共とかく常に酒を好み酔つのればいかなる旦那の大事の隱す事でも傍輩へと勿論他門の人にも打明て語る者なれば此度の密談は主人の内證殼になりしを工面にて是迄の如く世間を張り計略を以て立なをさんとする密々の大事面々の妻子にも洩していならぬ談合なれば次郎兵衛を此相談人に入てい呑がさいご例の持病の沈酔に及んで人に洩すい知た事さありては七日の説法一盃の酒にてぐはらりと内證世間へ顯れ却て御身上の障りとなる事と次郎兵衛を除て後家は番頭の太郎兵衛三郎兵衛兩人ばのりを招き内談あれば次郎兵衛我

身の酒の失ある事をわさまへず若き後家御なれば世間より名悪を立てぬやうにぞいぶん御身持正しうなされ万事御慎みと御爲を思ひ申上る故にむづかしうれぼしめし我等を遠のけられかりそめにも太郎兵衛三郎兵衛と御前追從をいふ奴等を招かれ奥の間へ取籠つての咀言ろくな事ではあるまと追付太郎兵衛三郎兵衛が種を孕れ御家に瑕を付られ跡取の龜之助殿の面の穢るゝやうな事な仕出來給てんと思推廻し殘る若手の手代共を勘定場へ招きあつめ此間太郎兵衛三郎兵衛後家御へむしやうに取入夜に入ば両人ばかり入かはり〳〵奥の間へまいり侍女以下迄其間へまいるなとちかませらぬよしいかにしても合点のゆかぬ仕形慥にいたづら事に極りぬとおぼゆればいづれも一統に後室殿へ急度御異見をくわへ太郎兵衛三郎兵衛兩人へ暇をつのはさるゝやうに申上んと思ふが各はいかゞ思はるゝそといへば元來頭に血の多き若い者共此間太郎兵衛三郎兵衛が奥ばいりをむつとして法界悋氣の最中なれば跡先の思案も無皆々うなづき成程貴殿の推量の通り後室様を兩人して慰ものに仕る樣子第一傍輩を踏付け申といひ其上後家の御身なればとてもつたいなくも御主人の奥がたを二人入かいりに戯れをつくす事法外とやいはん不忠不義の至り且は若旦那龜之助樣の御恥辱兩人の者に暇を出されずして御家の瑕瑾龜之助樣を御願手の頭にしてこなた我々迚

判して後室へ願ひ申其上にて伊助入なくば龜之助様を連まして我々此御本家を立退北濱の御別家へ移り何商賣にても新に企申さんと云ば次郎兵衛大きに悦び口上書を認め次郎兵衛始め殘る八人の手代共連判して翌日早朝後室の前へ出大郎兵衛三郎兵衛兩人へ御暇を出されずは藏々の金銀諸道具を取出し龜之助様を外の御家へうつし申我々其後見して別に商ひを仕る存念に相きはめ候と調をそろへ申ければ後家御手代共が口上書辨に一統して申旨を聞れ太郎兵衛三郎兵衛共に不實成る事はなけれ共わらは若き後家の身なれば其方共が心にきへ不行儀も有るやうゐ疑へば增てや半季居の下々共は猶以陰沙汰にいはか成事をか嘲廻らん然る時と家の内より主人の惡名を囀るといふもの内々と兩人を龜之助後見にもと思ひゐつれどさやうにうたがはれてと傍輩中はだ〳〵に成て純熟せまし熟せざれば家騷動の基なれば兩人共に望姓をやつて宿を持せ片付てまふへしと兩人をよばれ口上書を見せて惣手代共かくの如くの願ひなれば二人共に急々に宿ばいりをいたすべし則過さり賜ふ旦那様のわらはに仰かれし御遺言にまかせ太郎兵衛には北濱の家に銀五十貫目つけてつかはすべし三郎兵衛にと堂島の家に三十貫目付てあたふるあひた兩人共に何商賣にても仕りすいふん排出して主の名迄をあくるやうにして毎日たへず此家へ見まふべしといひ付くるれ

ば有がたき仕合と悦びもらひし家々へうつり女房も先むかへず若い者一人と小者をれきて當分商賣もなければ兩人共に濱の米市に出太郎兵衛三郎兵衛別々に問屋を極め毎日市に出ける元來所にて名高き主人に久々舊功をなしたる手代共此度大分の望姓をもらひ大屋敷迄申請たる丈夫なる内證を知ぬいてゐる問屋共なれば數金なくても此兩人い自由に市に立まといりぬ太郎兵衛は抑〳〵より弱氣にまて賣てばかりゐれば三郎兵衛は强氣にて毎日買てゐたりしか太郎兵衛が思ひ人氣に叶ふて段々相場下直になつて賣ての福ひ纔一年半ばかりに三百貫目余もうけぬ三郎兵衛は是とちがふて始終强氣下る程猶買込の拍子ちがひ損金積つて五六千両に肩こして家財をすて、書置殘し夜の間に欠落いづくへ行けん在所知たる者もなし次郎兵衛此様子を聞て後室に申ける私は親旦那御堅固なる時分てつちに參り今龜之助様迄三代の泰公人親旦那其時分の手代衆へ御渡されしと汝等面々我世を經たり共かならず一生の中新田金山米市芝居事の銀元する事無用との御金言末々迄見通しの如し三郎兵衛義結搆に仕付てつかはされしに大欲心にて米市ゐか、り身一分滅亡いたす事か人迄に大分の損をかけ其上に大阪のすまゐもならぬ身の果主の冥加につき天道にくまれ生死も知ぬ身の仕舞か、る邪欲の者御家につとめゐる中にはたしなば御主人の御身代の障り共成べきによ

い時分に我々申出し早速御承引あつて御暇を遣はされ御仕合と申せば嫁入してより以來なゑゝし三郎兵衛なればいづくにぞふしてゐるぞたゞふびんなと涙をこぼされければ次郎兵衛むつとして結構な家屋敷お過分の金をそへて遣はせしに二年も立ぬ中に皆にするのみか其身も欠落して親方迄に恥辱をかける不とゝき者とおもしかりも有べきはづを不便なと有て却て涙をこぼさるゝは御家お居し時分けありし故と後家御の顔をながめ心の中おもいたづら者とさげしみけるも子細を知ねばとはりぞかし扨次郎兵衛近所の借庵にて精進料理をいひ付若手代共をなぐさめよせ三郎兵衛が逐電せし事後家御にはいかいおれ力落しで泣てござる各我等はよい事をしてもさのみ御褒美の御詞にもあづからぬい兩人が樣な後家御の御意に入出頭高慢の鼻を持ぬ故是非がなにとあきらめゐれ共太郎兵衛事は三郎兵衛同然に端商ひにかゝり思入の手がおひ大分銀をもうけたと濱中の評判笑止な事は是切で止たらもろふた家も別條なふ持こたへふが必利を得る程やまぬ物なれば今の間に三郎兵衛がやうに成て仕舞詰る所い旦那に損をかけさいものでなし所詮向後米市をやめずば御家へ出入堅ふ無用といひわたしそれにてもやめずば數居より内へ足踏もさせまゝと思ふなり是全く偏執おていふにあらず第一はれ家の爲次には太郎兵衛が身の爲なれば又申合せて明日太郎兵衛を後室の

前へ引つけ止るか止ぬかの是非を聞んと思ふなればおの〳〵も我等が跡につゐて申されよといへばいかにも〳〵是は尤三郎兵衛が身の果を見ては後車の禁め至極〳〵と皆々打かたふして精進食を喰た同志の寄合酒ぐるみ九分五ッンへやをい飯代

○　主從の中角のない丸鏡曇らぬ番頭

武士は主君の御馬の前にて討死し名を揚桑花を子孫に殘せり町人の手代命こそい捨まじけれ。親方の身上潰るゝ時は我世帶を打込て少分成共主の役に立さふなものなれどいかな〳〵。身代しまれし旦那の門を通りても見向さへせず却て主人をたわけものと嘲り謗る族世上に多し手代の次郎兵衛庵にて若き者とゐひ合せて太郎兵衛に向後端商ひ止るよふ神文を書せて取べしと皆々後室の居室へ罷出すでにいひ出さんとする所へ太郎兵衛宿より來りてげふい各をかゝ樣のれ側へ招きゆ咄申さんと存じた所にいづれも打そろふて詰てござるは幸。扨て次郎兵衛にはいふをあり其方程奉公に疎略なく上故昔からよう勤る人はなけれ共酒を飲るゝと大事小事おかぎらず耳へ入し程の事を譫言のやうに打明て人に語らるゝ故主人の御爲にならぬがちなり。然れば忠にはあらで不忠の手代御家を眞實大事に思はれなば自今以後盃を手にとられまじかふ申渡す上に呑止まいとの心底ならば直に只今暇をつかは

さる。さなくては今御家の一大事を打明てそなたに聞しにくひ神文して呑とまる所存かといへば次郎兵衛神文の先を越されさよつとせしが弱身を見せず身共に酒を呑やめとの神文を望まるゝからは我等もそなたに向後米市にかゝるまいとの神文を書するが合点かといへばはるゝ迄もなし禁酒の神文を望からは身も好た端商ひを止る心底で則自今名まへをかへてもだてり商ひをせまいといふ神文を出て參つたと懷中より熊野の午王の裏におそろしき誓言書しを出し人々の前にして小指より血を出して血判をして見せければ次郎兵衛も手詰になればいやといはれず硯引よせ讀ば身の毛もよだつ斗の禁盃の神文血判してさし出す。太郎兵衛是を請取扱次郎兵衛酒をやむる此神文の上は打明て樣子を語りましてもくるしかるまじと存ますると後室へうかゞへば成程〳〵是迄そなたと三郎兵衛兩人を奥へ招き密々の談合に次郎兵衛を除し譯を速にとなされよとあれば太郎兵工手代共の座上にねなをり。戒に先旦那御存命の時分げいせい狂ひに大分の金銀を費され內證明殼になりしを苦にして重病となりついに御果なされ何ぞ身代の尾を見せず。御家を相續なされたいと。後室樣にも思召し我々もさやうに存じ次郎兵衛三郎兵衛に此內談をとけんと思へど次郎兵衛ふと一盃のまるゝと主親の大事に及ぶ事でも人に隱さず咄さるゝ惡ひ底有故に此密談の人數にい

入のたくそれ故其方を省き身共と三郎兵衛後室樣へひそかに內談をいたすを不義いたつらと疑心を起しさま〳〵の當言心外にと思へ共大行は細瑕をかへりみず御身代の大事にはかへかたく胸をさすり三郎兵衛と肌をあはせ後室樣へ方便の品をのみこませ申折から兩人に暇をつかはされとれの〳〵連判をてのねかひ幸の時と兩人へ御家一軒づゝ下され五十貫目三十貫目と望姓に下されしと申請ぬ銀を態と世間へ沙汰して面々分々世帶を持御家を出て米市にかゝつたるは旦那の內證へ金をもうけて竊に入んための計略然れ共相場物にて利を得るといふ事極つたる事あもあらず多く損して手を拂ふて仕舞がちなれば是非利を得る仕樣有ふと工夫して三郎兵衛い强氣に成て買手我等は弱氣に成て賣手問屋をかへて諸人を相手にして賣と買との思入いづれにても一方にい上りを請るか下りを請るか利を得る方なくては叶ぬ道理我等買思入の手があふてもうけなば其方賣思入ちがふて損銀するは極つた事どちらにても損銀のある方は家財をつき出し欠落仕舞と觀念すれは一方の儲けともうけに立て過分の利を得るは知た事と三郎兵衛と示し合せて我と始終賣氣三郎兵衛と買思入段々ちがふて下りを請既に損金五六千兩所のすまい成かたく家財をすてゝ立退ぬ是元來覺悟の前我等と賣氣の思ひ入あふて十日の雨田地を潤し五日の風田の虫をいらひ諸國の

秋満作にて、次第下りに高利を得、三百貫目もうけ溜て、八知ず御家の金藏に納め、世間へ手を見せず、旦那在世の時の如く口入ともかいふて來るをかし先き慥なれば後共いはず五貫七貫目取出してかしつけ前後うたはれずに今日迄丈夫に見せしは、此計略と内藏に積し銀共を見せ是からは端淌ひにかゝるぬが秘密と諸神に誓ひして我心から心を誠し以前の神文と今とは ふ今心の眞をわかしければ、一座の手代共横手を打て感じける次郎兵衛たばこのみて聞なたりしがくはへしさせるを取なをし太郎兵衛前にさえぎ世間の手代の風上にも置ぬ不忠不屈の家來とて拙者が事御主人の後室様へない名をたてかゝる忠義のこなたに御隙を出されよと若い手代中をそゝのはかせて一統させ連判迄押て追出さふといたした此次郎兵衛が生類に死ぬる迄跡のつく程此させるを以て擲て胸をはゝして下され太郎兵衛殿さりとて〻御心底が耻しい心より此口めが科人と我と我口の端をつめり涙をながし先非を悔ば太郎兵衛も是にて納得出恨むる所存もなく其方が酒さへ呑やみて賜いると御家は無事に龜之助様の御家督万事長久に治るといふもの後室さま御盃を次郎兵衛始殘りの手代中へもつかはされと太郎兵衛指圖をて主從さげんよく盃事濟て此上はと内藏の戸を明させ三百貫目の銀箱改めて次郎兵衛に見せ龜様半元服でもなされてから自然悪所への御心あらば命にかへて

御異見めされ扨拙者と今日より御隙をもらひ剃髪いたし年來の望なれは日本廻國仕る息災にて殘らず免ぐり課せなば立歸つてふた、び御目にかゝるべきと後室ゐ暇をこへば次郎兵衛罷出是はと迄に御家を立直され龜様に嫁御をむかへて御家督をわたされ其上にて廻國あつてこそ今迄骨をれらせられたる甲斐はあれ只今御奉公引れては正具の佛道て眼を入ずにしまはるゝといふもの此道理を承引なく是非廻國との事ならば拙者も今日直に御暇申請ると思ひつめたる顔色さりとは奉公を苦勞に思ふて身をのがれ廻國いたさふといふにはあらず銀をもふけて御主人へ進上いたさ忠功者とて後室さまをいしめ各の馳走せられ大きな顔して御家の大黒柱にもたれかゝり珠數つまぐりて出入の人に腰かゞめさせ慰みがてら朝夕の味噌しは薪の指引をいふてれらば御爲にもなり自分も心安くて外へ隱居いたさふよりて大き成樂〻なれと此太郎兵衛が今日の働きは皆以て三郎兵衛がしてくれる忠功身共が奉公とては針の免でついたはともなし惣じて八手代其家にて番頭とゐがめられ大勢の手代の上に立て支配をし万事心儘に捌けば出入の商人共が盆正月時折の付届の進物も旦那へは輕き物にてすまし番頭へと銀免の重き音物をれくるやうにもてなされ銀借り衆の追從の振舞に招かれ三軒つゝきの棧敷の上にて大名顔して見物し芝居果から直に川御座へむかへられ

色ある遊びもの五七人のせて小歌に三味線ひきのばせ旦那〳〵と取持大鼓共にそやされ美をつくしたる料理も書からの酒ゐ傷て箸さへ取らずうつゝになつて歸りゐは主人の門口迄駕籠にてゐくゝれ内へはいると姿ふて下さるゝ御主よりハ恐怖てでつち共迄いひ付ぬに薄茶立て持て行ば奥様がれ氣付られて侍女に御小袖を持して出されねてゐるすそへきせられ出入の八百屋が臺所に見へるを櫂拐によひつけ腰ひねらしていけもせぬ聲で所まだらに覺たる若大夫が道行をかたり寢入ゐする手代の自分に成て我身を持こたへしものはなしいづれ冥加につきそふなものそかしかゝる奉公は誰も仕よきものなり不便や三郎兵衛ハ旦那の御爲に損金して身代まひ逐電して一家一門をとしめ諸万人に横道者と嘲けられ馴染し所に住所ならず廣い世界がせはふ成でいづくに總をしてゐるやら在所もしらず我一人手拐らしう頭がはしてゐられふものか廻國といふは全我身の後世の爲を思ふての事ならず三郎兵衛が行衛を尋乞食してゐるなら我も俱ゐ乞食して一所に人の門に立てもらひし物を分けて喰諸共に主人の爲に困てこそ眞の忠義共いふへけれ最初三郎兵衛といづれの方にても一方損せず欠落するがてんといひ合せて親方の爲ゐ詰る所は乞食と互に胸をすへての事成に三郎兵衛ヲに艱難させて我は御家に飢寒しらすにゆたかにしてゐては傍輩への義理が

立ぬ若淵川へ身を沈たらば其所にして拙者も死ぬるがてん必とめられてもとまりはせぬ。御暇も出ぬに家來の方から押て隙取ト剃髪いたすい道ならねと其段と御免下さるべしと小刀にて髪ゐ切妻子のない身は氣散じ其夜より三郎兵衛が行衛を尋に出けり前代例なき町人の手代鑑曇りぬ心の心底を汲て皆人感しぬ。

○燒が反へ廻る刀屋の手代が無分別

町人の氏系圖は金銀ぞかし商ひの道に高下の位はなし商賣い草の種何をか上りとし何をか下りとせん愚なる親心にて我子を奉公に出す時主撰してゐれは箱屋是は米屋の荒仕事と金銀見せに蒔ちらし惜兩替屋へ奉公に出しぬ在所で見馴ぬ一歩小判にあたわぬ欲心發り急に自分のもうけを願ひ小判市にかゝつて大分の引負親請人に投害をかけて其身は一生日かげ者と成て果る者世ゐ多し大家の主を取たればとてむしやうに出世するものにあらず人の貧福は此世へ生れ出たる初より定たる天命なる事なれば智恵才覺にて出世する事にはあらず持て出た果がなければ長者の家に万年勤ても過分の出世はせぬものなり小鍛治正宗のどさ名作の刀をうたんと鐵をきたひ百日精進して打上ても其さゝの奈良刀是でも兵盛の時には用に立共世の賞觀にはゐづからずとかく持て生れた果報なくては世上に知るゝ程の身には

成がたしで、もむかしい奈良の京〇〇〇〇久しさ刀屋勝八伊八とて子飼の若い者二人にぢよさいなく奉公勤けるに其近邊の晒屋につとむる金郎兵衛と云ふ手代と此刀屋の内の伊八とは生國おふミの同村にて在所での草刈友達互に近くなれば折々の出合の晒屋の金郎兵衛伊八にいひけるは其方と在所にてこちの親達とはちがひ田地も多く内證もよさに惣堂の坊様の所へ三年迄そなたを手習にやられあつはれ村にては手習といはれた其方今は猶以能習るゝでおろふ我等は貧成親にのゝりし故草は苅に出されこれ其引て行午のつのもじさへ知ずゐ奉公に出在所へ狀のやりたい時に文はかゝいで頭をかきしに儘〳〵はて夜ゝ十三鐘のなる迄手習して今は日記づけする程にはなりぬそなた程の器量でちいさい刀屋につとめて一生秀すにうづついてゐやうとはふがいない我等ゝ事公に來て五年立ぬに去年から仕着をやめて一年十枚にして給銀下され月に六齊遊山日とて隙を賜り大佛の前のゐづゝ屋へ精進めし喰にゆき其酒きけんで木辻へ遊びにゆく一家衆廣ければ祝言の法躰の孫樣の髮賣榜着の有卦に入れた祝ひのとて思ひもよらぬ包銀をもらへば不斷紙入に小さが手のたゆる事なしさりとは見切て隙をとり外の有德な主を取替られよとすゝむれば伊八聞てから出しがり十枚とは四百三十目の事か一年にそれ程も奉公人ゐ給金をくるるものか我等と十五年切て今

年八年ゐれど夏冬兩度の仕着の外は西口の御内儀の親里へ五節供の祝儀を持ゆき包錢十文づゝ渋にいたゞいて歸りどふぞ是をためて今時の若い者が持やうな金入のたばこ入がほしいと思へどさりとは一文八分はたまりにくいもので今に此かつぱのたばこ入ですまそがなんと其樣に銀のとれる所があらば奉公にゆきたゐが情ないとまた年が七年かゝつてあれば中々暇はくれまい其方は果報な家へありついて仕合とけなりがればハテそんな塒のあかぬ家にまだの〳〵と年の明迄勤てゐるものか隙の取やうの肝門の秘密を傳受いたさふ明日でも親方が急ぐ使にやゝるゝなら口上請取て直には行ず先帶仕直しにかゝりくどくゝと隙入てゐると内儀がやり壁出して伊八急な使しやと今の程旦那殿のいとるゝにちやつとゆけといとるゝい知た事そこでわざと顏をふくらかし帶せずに門あるたり刀屋の伊八は馬追に成たかと笑ひますれば且と御主の外聞がよう有まいと思ふてそれで帶して參ります向ひの墨屋の長兵衛はれれより三年おそふ奉公に來て絹の帶さへ三筋あるげな一筋も一筋とて此帶のつよゐ事はとつぶやきて内を出すぐにさきへは行ず道寄して隙入遲ふ戻ると内には待かね急使にでつちの時と同しやうにどこに情斷しておつたとねめ付らるゝ時情斷も下段もいたしませぬ生れつゐて不達者なれば道の遲いはせふ事がでざりませぬ急いてもとつたり

や腹がをいたすぎ茶碗あたしを一盃せふと膳棚にかゝれば氣の短い親方なれば腹にすへかねわづか七八丁有所へふた時ばかりかゝつて主に口あかせぬやうに殺意なる返答とぶちにかゝるいきさまつた事そこを逃ぬものしや御主の威光にはたゝき殺しなりと御好になされませ盗とゐたさず傍輩のれなご衆とせゝくりあひい仕らず使が遅いとて殺さるゝも過去からの定まり事私が兄は武士の果今井村に兵法の師をして近邊の侍衆ゐ指南一徹な聞ぬ氣な人在所の親父は所の庄屋役御地頭へ向ふても思ふ事をいひぬかねば置ぬ理屈人私が死たら親も兄も無念かられませふ迎の事に其割木より見せにある寶物の奈良刀で一思ひにやつて下されませと墓所に横にねければいかな親方も仕舞つかず内儀のとりさへらるゝを去ほにして奥へ入る、と我部屋へといり頭痛がするといふてそれからは山が崩れてこふが起て出ねば佛のやうな主でもあいそつかして隙出すもの玄や目に見へていひ立になるやうな仕損じなければめつたに着がへれさへふ共いはぬ物じやと悪智恵付てそひき出せば我身に冷藥もるとは知で是にのりて其手を以て七年迄つとめし家を不首尾にして出扨外のよい商人の方へ奉公のぞみ目見へすれば手跡が見たい消息向がなるか御家流大稽流か能書でも唐様なれば間にあはぬと手の詮議に日記付ほど、は出にくし銀見やるか十露盤かなるか

といへば成深ど地算はれきまする地算はちいさいでつち共もれぼへて不断の小遣帳はあれらが算用するむつかしい割物がなるかと尋ねる程の事ひとつもならすそれでは此家には縁がないと云れてすご〳〵と帰り其後三十所も目見へすれば十九とたちのつかひ盛の若い若を子飼の親方が今出すからは一ト子細なふてとならぬはつとでつちの時とはちかひ疵ものと疑ひてれく人なくてうろたへ玄かも他人宿なれば一日ゐれば一匁五分づゝ飯代をとられひとつ〳〵着替はなくなり肌薄になるほどいよ〳〵れきてなくて今はとや跡へもさきへも奈良坂や時雨に夢笠なく手負といふ町より夜をこめて旅出立雛も我と鳴くらべして此体で在所へは帰られず江戸へなり共ゆきつきて次第にと此頃居たる宿追出しの鐘の鳴時春山を跡にいつか本の親方へかへり三笠山も今が見れさめと成なんと心ばそくもはる〳〵の東路へ下るにあはれととふ人もなしと獨言の涙ゐ壁有て佐保の川を打渡りてと諸を門々ふてうたひ勧進して漸四十七日めに御江戸に着て麹町邊の請人屋の喜助といふ方へ在所からの所縁有てたづね行次第を語て頼みければ先馳走に茶をゐかし臍村の長次郎殿の子息かきづかひめさるなど細に様子も聞ず其若盛では何をいたされても口過ゐとの事はきづかひなし先一両年は奉公いたさせ其後ゑ分別もあるべし出かはり時迄は用もあればそれ迄縁の捧

手振なり共いたされよ後に長者に成てもそれが身につけてゐるものにてもなければすこし
も耻辱にはならずと霜先の朝道をいそぎ四ッ谷の町はづれは里人を待大根の出買して一日
かたげて賣廻りくれに歸りて氷ゐ等さ冷飯を喰此つらさ皆晒屋の金郎兵衛めがたまかに勤
てゐる家をそゝのはかしてそひさ出し此なんぎをさせれると今悔んで埒の明ぬ事を口の中
にてつふやき木の葉のやうな垢付し蒲團をかふり寢かゝる所へ表をたゝきこちの御内儀樣
の日暮に赤子産しやつて胞衣捨に行者がないさげんよう笑ふ人があらば百ですてゝもらひ
たいが誰もござるまいかのと薦につゝみし物をさし出せば亭主請取百では行ふか知ぬが捨
させてやりませふとねあたゝまりし伊八を起百とれる事じやすてゝれじやといふ是れめい
わくとは思ひながら百と云錢取はづすが悲しさに起て出こも引さげ出けるが行先家つゝき
にていづくに捨べき所もなく殊ゐ昨今なれば所は不案内明地もあらばと方角知すにむゑや
うに持廻り目黑原にて爰こそ煩木の下へ立寄何たる因果ぞと額にゑわよせ打付ぬ斗になげ
捨此粉と一代煩癖がわるからふ胞衣すてる時ゐ笑ふてすつれば其子一生愛敬有て人に憎ま
れぬといふにいと〻百と云捨賃とり冥加の爲ゑやと立戻つてれかしもないに高笑ひして歸
るを煩木の陰から聲かけて此邊は不動明王の靈地穢た物をすてゝゆかば地代を置て行さな

くば立所に明王の金しばりにあふて忽うごく事か成まいぞと闇がりからいふにれどろき賃
にとりし百の口十文ぬいて此錢は此木の下に置てもさませふかといへばそこへ身が取にゆ
くと立寄音もぞ〳〵とすかして見れば芨かぶりなりれのれ野ぶせりの分で地の穢のせん
さく捨た胞衣にれとつたうぬが身の不淨はぬかさずして地代ととろふとはそいさんなやつ
とさん〳〵しかるを乞食進寄どうやら聞たやうな聲ゑやろちい南都の刀屋の伊八ではない
かやあささふいふ物ごしと晒屋の手代金郎兵衛が是は〳〵と肝つぶしどふして非八を成て
しかも所をさつて此所にいゐるゑとへばよしない奴にたばかられ勝負事に打込旦那の銀
を大分明ケ夜ぬけにして御當地に伯父のゐらるゝを便りに下りしが六年以前に死なれてゆ
かりさへなく身の廻り賣て命をつなさ纔二ケ月斗に物囉ひになりしといへば其はづしや汝
が言葉にのせられてじひぶかい親方の暇とらふ斗にそちが傳受のぶ奉公して出てかられき
てなくせうとなさにこゝへ下り其方にゐふたも互に主の罰冥加知ずの無分別者共に我々は
よいみせしめてはないかと二人さんげしてかほをさらしぬ

○巧は深い智恵の海底の知ぬ人の心

京大阪共に近年新地多く棟をならべて寵賑ひ寺社の奉加に分際相應に金銀をれしまず付ば

こそ堂搭社壇の修復結搆に出來ぬ是を思へは金銀むかしに増り次第に澤山に成たると見ゆるにどこへ取て置て見せぬ事そ是はと人の出か絲る金銀を目けもなき遊興には少しもつかふ事なかれ溜るはとけしなく減ははやしいかに主の影にて米唐櫃に喰物のありなしも知ず身寒かふぬとて勤へき奉公を疎略にして帳相仕か、つても誘ひ手あれば俄に店の用で出るとよいかげんに嘘いふて身をかざりて遊山に出けり南の茶屋北の新地の遊ひ所へ出かけぬるを見れば兩替屋の手代ゑやうかん一歩細字れんとび坊主銀絲んじや板白似せ赤似せ万いきにくい金をいきよに所て時ちらすがこんで紙入にゑてため大臣顔して行もあれば本町邊の古手屋の手代又一風ありて上は興島の布子に紬裏下着い地黒の綸子縫鹿子入の女着物にうこんの襟かけて分別の裏綿透通りやうなたうかぢりめんの綿入羽織胸紐は八ッ打の長短は片々しを合せしや毎日出るに同じ物着ぬは見せの商ひものを親かたに隠して自由にすると見へたり次は道具屋の手代着類よりは腰の物に直打見へける大形は旦那と利分してかづいた物は年々見せさらして三年に一二度づゝ毒流しとてもやくやの内へ入ぬ雪舟の達广正具に極れば目をむいて我買物にし似せなれば蘆の葉にのりしわろと帳面に載かへて達广損ゑやとゝはせ茶入花生茶碗類高廉へ投銀井戸の端に子飼の手代にもゆだんとならず主たる

もの、心の樂燒となし生藥屋の若い者は十露盤帳相惣て算嫌しかも和藥ものなれは旦那に砂糖をうたれてとうやくの苦口いとる、をぬったり半憂主の見脉をうかゞひ當飯にあふやうに加減してみやうばん出やうと手とづ合せ藥身を粉に碎きても出たがる惡性者つゐにと主の家を追出し飲と知た事と笑ひぬ當津の新見せ今橋あたりの絹布屋の銀右工門方の手代與六兵衛と新座者なれば京の呉服屋に久しくつとめずいぶん商買の道に賢くすぐれて商ひよくしければ傍輩猜て居るにわられず中途に隙を申請て此店に二年あとから勤しが外の若いもの共より商ひの高をし此度も上町ぢかくの丸田屋輕安といふ樂隠居佐渡の姪が嫁入の道具世話をやいて買調へて下さるゝ絹類卷物縫染ともに此絹屋の與六兵衛請取縫箔鹿子類綸子綸子段子の夜具等かけて銀高凡二十一貫目余りの物を賣て銀子は來月晦日切に極めぬ先とよい商ひしたとて親方の悦び輕安衆をしばゐで成共ふるまふたらよからうと氣をつけられて傍輩の手代共もろ共に輕安を嵐しばゐへ同道してなぐさ免すぐに夕飯を濱側の大茶屋にてふるまひ遊びもの取よせ彈てうたふてゆさげんをとりける輕安一とふふ悦びよいきげんにて歸られぬ扨晦日近くなりし時佐渡より代銀のぼりの遲きを待かねてゐらるゝ所に祝言の道具を積し船雲州灘にて破船して殘らず海底へ沈しとの便り輕安驚き先與六兵衛を

よびよせかくの通りの仕合海上にて船を破沈し道具の代を姪か方へはひ遣す共今い身共が姉は死でゐられず姪が親の姉聟は偏屈者にて義理も法もかまはぬ木は木銀と銀と一文が直でも替りをとらずに銀出す親父にあらず然ればいふてつかはしたり共道具請取ぬに代銀はやらぬと返事するは知た事とかく拙者が身の災難此度諸色の銀高二十五貫目へ此家屋敷道具共に御中間へ相渡し我等い此儘にて立退申さんよろしう頼むといはれければ與六兵衛與をさまさぬ御笑止千万とい申たいが去とは御自分樣よりなんぎなは拙者が身今の旦那へは二年跡から參りいはゞ昨今者ことに此度の義とれまへと私に近付にて商ひいたしたればどふも親方へ申がたし御出なされて主人へ直に仰られて下されと色ちがひして立帰りかくといへば親方大きに肝そつぶし外の手代共を催促にやられければはや外々へも聞へけん塗師屋蒔繪師さし物屋金物の細工人組屋の女など寄所につめかけさま〳〵との問答いふて見てもすまぬ事なれば先輕安老の家屋敷諸道具かけて何程の銀目有ア僉議して見られよと割符に馴たる男が申出して谷町の古道具屋ゑたのゑ諸道具のねぶみさせて十貫匁ひかへておいて見るに家財共に五貫五百目輕安飯料の爲他所へ預けおのれし銀五貫目打合て十貫五百目余を三十五貫目余りへ配當して見れば凡三歩に廻れり尤二歩に廻る分散も世になき事には

あられ共賣で間のないゐ大分の損銀と成がたし　負せ方の頃なれば呉服屋の旦那中々さかれぬを輕安難儀の余りに此呉服屋銀右衛門の旦那寺の和尚を頼み家財渡して身ずから出るとの歎ばさすが慈悲を表にせらるゝ和尚ふびんに思はれ段々詫をして三歩にて濟され廿一貫の絹布代へ六貫三百目請取て堪忍せよけり手代與六兵衛は元來小氣者にて御奉公に參りて漸〳〵二年たゝず勤て存せぬ事とい申なから十四五貫目余の御損をかけ申なま煩さげて御奉公は成がたし何程の物もなけれどせ免て私の冥加の爲に一跡を指上ケ申百貫に縞笠一蓋と思召し下されと捕て來りし半櫃葛籠に入置し着がへ脇差御主人へはゞかりながら奉る私は此襦伴一ッでされば北濱へ參て中仕の小ずかひ者に成共又は水賣なり共仕りて通りますと涙をながせば其方巧でせぬ事破船せしい身が運の惡さゆへ思ひもよらぬ損をした厄拂ひと思ふて胸はすまして居るほどに苦にせずと是よりはよ〳〵商ひゐゆたんなく此損銀を埋てくれるほどに精を出せとさすが大商人程あつて大腹中なにひやうありがたき御主の仁心と悦びはずれどとかく心にかゝると見へて朝夕の物もしか〳〵喰ず傍輩共が浮世咄の相手にもならず疝咳病から干鱈取くらゐにさりとはちいさい根生十貫目二十貫目などの損銀といたむやうな親方にはあらずそちがやうふ心では手廣ふ商ひは得せまい鄙雖廻す職人の針の

みゝずよりちいさい氣筆をかさねたと此御家の番頭職は得持まいと寄ていさむれど物も高ふいたず表二階へ上り何やら長々とした狀を書を傍輩心得がたく階子しづかに上り口からのそいてゐれば狀書仕舞長押に細引かけて半櫃の上へあがる所をやがて走り上つて是は與六兵衛狂氣したかとつれて行り旦那へかくといへば扨々小氣な奴かなさふした事ならばもはや今夜の中も心元なし請人へ渡し手元に及物なども置ぬやうに此首尾を語り請人方へつれ行き手わたしゝて來れと手代二人に下男迄つけて與六兵衛を宿へかへされしに四五日あり て請人木工兵衛參り與六兵衛歸りまゝてがらうつゝにも此度の事を我一人の不調法と存じ込傍輩衆の手前へ面目なければ死ねば一分が立ぬときのふも非口へ身をなける所とめましたれば今朝いしりもとへかゝり出刀包丁を逆手に持ます所をれさへ段々と異見仕りまし たれ共とかく心がしづまりませぬきやつが當分の氣を轉しますが爲に御暇を申請まして ゆるりと養生をさするぞと申まゝたればそれからちつと氣の外も靜りましたやうに見へまする私請人ながら一人の甥なればふびんに存しまず五年の年の内なれ共ゝふゞ御隙を下さまましたらば昇た氣もれさまりますやうに藥にてもたべさせとくと本腹させまして御恩ふゝりに又御奉公に出しませふ八間一人御救ひなさるゝとれば しめし御暇を下さりませと段

々断いへば親方銀右工門聞れ仕損ぜした者ではなし隙を是非やるまいといふでとない律儀な心から面目ない程に隙をくれといふによつてくるしうない其まゝつと先よと止し事なりいかさま其ごとく氣の昇りし者をつかふもさづかひなれば願ひにまかせ隙をやる程に隨分灸でもさせて養生をさせられよと着替の入し半櫃葛籠を渡されければ請人かさねて與六兵衛が申ますれれいとまを申請てござる共私が物とて扇子一本取て歸らぬやるな慮外なれど直に着旦那へ指上てでされと堅ふ申付ましたれば其まゝ内かたにれかせられて着替は雜巾に成共御つかひなされて下さりませとふを其小氣から氣違半分に成たもの玄やたとへ百兩二百兩が物がれればとて商ひの賣先にて念を入た上で思ひもよらぬ天災で損をしたとあのものが科てはない家來の道具を取留れかふばづかない久三郎此道具を持ていでやれと慈悲ぶかい親方内儀も突止がりて同じく臺所へ出られ日比與六兵衛と柔和な人で子共かはゆがりて此四五日と平はとこへゆきやつたゝといとが尋ませはるずいふん怪我のないやうに氣をつけて氣分もえづまつたらそろゝとれじやとふふて下され乳母なんゞ寄になら ぬ着があらばとづけてやりやと心を付らるれば鰹節に奈良漬の香の物何やらかやら取添て久三にわたせば請人うれしく數々禮を申て荷物をもたせ宿へ歸り旦那へ佛々と悦ひて神棚

（御酒上がけり

○詫金を頭て取先斗町の借座敷

都なれや東山を庭前の築山になし泉水に賀茂川の流れいさぎよく鳥屋の鴈鴨群ゐて遊び二階の雨戸明させてきせるくはへて見渡したり朝氣色雲より上に啟山の頭斗見へし先斗町の借座敷に養生の女中と大阪今橋の呉服屋の銀右工門の内方氣の方の樣な煩の仕出しとて一家れどろき療治は今こそと近頃より京へのぼり此座敷にて小儘の養生枕にひゞく樽太鼓の音に心うき立芝居行の京女郎足取はやく板橋を渡るさま野郎役者の樂屋入こゝぞ都の中の都ぞと詠にあかずいづれ遠國から養生にのぼりて病氣は本腹して色と云煩ひに取付仕過してぶ首尾で歸國するもとはりぞかし呉服屋銀右衛門内儀見舞を名題にして逗留せられあなたこなたへ遊山に出られしが川原町近所に店付のよい絹布店手代四五人絹卷物を裁切隙なく繁昌に見へける奥より旦那とれぼしく手紙ひろけなかゝ出緋縮緬の衣裳は以上七ッ白光の切付が急く縫物屋へはやふいふてやるへゑと手代共にいひ付る顔を通りかけに見れば去々年隙をもらひゑ與六兵衛なれば肝をつぶし慥に此店の主人の躰俄にかゝる店を出す事がてんゆかずと立歸り思案ゑて借座敷の家主い割木屋あて直に表が居宅なれば此薪屋の亭

主を頼ミ流もやうの表を見たく此方共は旅の者こなたから人かいされて手代に敷々持て參りて見せてくれとそこの絹布屋でと所をいへば主承り其難波屋と申絹布屋は私共も少しつゝ物を取て痩得意でござりますれば申てやると早速手代が持て參りますと小割にいひ付つかはしければ間もなく手代風呂敷づゝみをかたけ薪屋の表からすぐに裏の座敷へ通れば呉服屋是へと呼入て見れば嘆きいふて隙もらひに來りゑ請人の木工兵衛なり座敷がりの旦那を見て木工兵衛はつとしたる氣色内に物があれば色外にあらはるゝ顔付旦那供に連て來られゑ手代の市兵衛勝手より出こりや木工兵衛殿大阪の綿打弓の弦仕事をやゑて呉服屋の手代にありつかれしかといへばされば與六兵衛が歸りまゑてから一人過の私を喰立まして内證の弓の弦きれて大阪の世帶を破り與六兵衛が咄しで聞覺た絹布の道さへはいと難波屋へ内緣あつて跡の月から奉公仕りますが御緣ござりまして又御目にかゝりました旦那樣始めれの〳〵も勝息災でおめてたふござりまするといへば親方うなつき互に無事なればこそあひ申せ扨大阪の世帶を破り京へ奉公に出られたとあるが與六兵衛は何といたしたされば與六は旦那樣に御損かけた事を苦にいたし終にそれを氣にして去年の夏果ましたが末期迄御家の事を申出してれりましたふびんな義でござるとまさ〳〵との僞りこれ木工兵衛商人は

嗣人とちがひ落る事もはやし又出世もとやいものなれば急ゐ立身して大きな店も出すまいものでないがそなたの與六兵衛を死んだといふてかくさるゝには物がある最前與六兵衛が難波屋の旦那といふ事は身が直ゐ見て歸つた有樣に白狀めされといふたり共中々巧の深い人と見たれば迚も下でゝいいれまいてりや市兵衛此人に付て行主人與六兵衛も此木工兵衛も町所へ急度といり預けて參れと以ての外成眼色を見て木工兵衛が顏の色は土の如くに成て御慈悲に此度を穩便になされ下されませ表向に成ませと與六兵衛私輕安迚も木の空ですゞみませねば成ませぬ子細い與六兵衛御家に勤居る中米の端にかゝつて大分損金いたし是を埋んと存ずれ共年を經ぬ奉公人手闇間闇のからくり成がたく輕安と申は佐渡からわせた牢人上町に小家を持せ口過に按摩を取てゐられますに與六ひよつと懇意に成まして金の借口を頼み次第を語りましたれば手代の取込したは親請人の難儀になる事なれば仕樣によつて何方へも難儀のかゝらぬ計略ありと輕安のすゝ免によつて御悲慈ぶかい旦那樣の御目をぬきまゝた天罰で御直の御目かゝりまして面目もない仕合破船といふ方便を申て詫て仕舞手をよく十四貫目余の銀をしこた免旦那へ御損をさせましたを苦に仕る躰をして見せかけの首縊狂言をいたし結構な旦那の眼を掠め御暇を申受去る夏より只今の家をかり存知たる

呉服商賣仕り役者の舞臺衣裳地着物を商ひ纔一年余りによはと銀をのばし此躰ならば旦那を謀つた銀程と當年中には延るであらふのばしたにしたらば銀子を持參し段々の巧を白狀いたし御返納仕りませうと私にも申て居ます其時の催促に參つた時繪師指物屋等の職人も皆作り物にて旦那の御目をくらませし段御免下さりませと額より汗をながして詫ければ主人銀右工門次第を聞れしらぬ内は是非もなきかふ露顯の上は宥免い成がたし大勢はかふ手代共の前あればゆるかせにして濟しては跡から不實成る手代共の出來まじきものでなし其上第一金銀を馬鹿にしてさま〳〵と是迄つかひ去所汝等を木の上ですゝませ祐ば腹がいず日比の慈悲者とちかひ取込まれ去銀子にま一倍入て成共うぬらをたゞは置ぬと以の外腹立にて年寄家主へとゞけられ中々堪忍せられぬも斷至極町衆は不祥な袴を着て借座敷へ手をつき段々との取殴世間の手代の見せしめに仕るとさらに詫を聞入られぬば與六兵衛絶躰絶命の塲と見せの代物共殘らず質に入て金百五十兩迚出し座敷主の薪屋の亭主を頼みなげきければ薪屋も情ある男にて笑止に思はれ何とぞ詫課せてやるべしと銀右工門に向ひ色々と詞をつくしわびられけれ共承引なく自余の取込とちがひ主人の鼻毛をよゝし所が堪忍ならぬと牙を嚙でいはれければ御腹立の段と旨極れたしたが第一其元樣にも大坂住居の御

方にいにやはぬ此方便事をうまくとまいるが腹は立られな御鼻の下が短い共申されぬ破船いたしたと申さば大坂にては何屋の船にて出雲浦にて破船さたらば浦手形有べしと其時分船主と船頭が浦証文を見とゞけまだ其上にも胡乱ゐ思えれなば破船して荷物打込だ雲州浦へ手代衆でもつかはされ慥に見とゞけらるゝはづ京に住我等さへはや此心付まするに日本の大湊に住ながら此氣のつかぬはちと甘美ふはござりまず大坂へ聞へぬ内に百五十兩取て京で沙汰なしになされたら難波でよしあしの評判がなふて御外聞がよかるべしと云れて銀右工門も赤面し心の角を折つて百五十兩取てひそかにそまし夫婦共に大坂へ歸られぬさりとい旦那して喰ものも大勢の手代を頼みにしてゆつくりと枕高ふしてはねられず金銀ぢぐれてもうくる手代は算川合せてつのふ事に賢し律義ゐかまへて始末過たる若い者は利を得る事に疎しとかくよい事二ッない物ぞかし一器量有奴と思なる番頭を見侮り万事の捌きをまだるく思へと先輩なれば表向きて用ゆる顔すれど陰では傍輩打寄てそゝりぬ大商人の家の番頭堅き斗にても濟ず家相應のつとめかた有へき事なるに大家の番頭いまだ五十に二ッ三ッたゝず分別の額口丸て正直の頭を髮結にまかせ不斷花色紬の太の首卷をはなさず旦那名代に銀借中間の振舞に出るにも日野の見る茶の着物幾度か洗濯袖も奥口に縫直し

肌着は腰切に白木綿の單物在所の親父からもらひ来藤柄に割胡桃の目貫の脇指濃柑子の革足袋はきてはれがましき附會の座につらなり膳にすゑりて喰てしまふて箸いたゞき口の中にて御主の御影で甘美物喰たと悦びたゞ律義一遍ゐかまへたる男平生も隅々迄ゐ捨る塵塚の蕨をゐつめて錢串をなはせ立居に紙屑を拾ひ半切紙の反古を見こみ裏返して小遣帳にもならぬ墨ぐろな海いは拵出しでつち共の夜の仕事にくはんせ小撚を捻らせ挑灯手燭に取付し蠟の流れをこそげ火にかけて小撚を裁紙燭の代ゐ拵置夜の重寶にするなどさりとはぬけめのない御家の白鼠と出入の嘘が追從いふを末の手代のまだ前髮の跡の青き奴が吹出し半季に百貫目も拂ひなさるゝ御家の番頭殿瑣細なる事斗に目をつけ年中始末せられてからが高の知れた事此際の拂ゐ金錢の相場一匁の手前にて一厘通り仕かけてやれば百貫目の拂高では一貫目の徳なりこんな事には氣がつかず一年中紙屑蠟燭の流れていんだとて何ほどの事があらふそ十露盤やめて今から長い竹箸 拵 籠持て家の内をめぐり紙屑拾いれたが旦那の紀爲と大笑ひをけり若輩ものゐは一器量ある奴番頭に仕立て見たり主人を長者にするか丸裸にするか末での善惡は安倍の清左工門が占の本ひかへても見へぬ事と申侍りさ

○　旦那を尻に敷火燵温かな手代が懷

商人の口癖にてはつの際でも今年と商ひがなふてとの泣言いいへと京は九万八千軒今は民家つゝきて二十万八千軒も有りぬべし此人數貧福にかぎらず餅も數の子も喰ぬものひとりもなし然れば物を案せふ事にはあらず去りながら大晦日の闇と七月の十四日の月夜に釜とぬかれて懸乞家主に詫言をるは元日より知れたこと常々奢を省き始末を第一にすべき事なり京中の分限者も抑〻産れ出し時は裸なれ共夫々の家業にもたんなく長者鑑にも入ぬ殊更望姓のない宿ばいりの手代取つきの商ひより年を重ねて手廣ふするもたまかゐ勤て舊功をなしたる親方といふよゝ後立有りて急成せり物問屋の仕功銀の足銀かけ走りて旦那の方より借りて來て間を合せ手支ぬから人の見込よくなりてれしはなして大分の代物をかけてくるればれのつから手廻しよく成て追付家の主共なりて相應に手代を置ならべて十露盤枕に夢にも算用を忘れず身代を持かたの妻子を安樂に過すもでつちの時分より奉公を大事あかけ私をせずつとめし其身の冥加と主人の影〻必たばこぼんの掃除子守りの果をぬけ角前髪に成と銀取の袋かたげより次第送りの手代分になりて見るを見まねにあたま付きさと役者のとく茶袋に糠を入て女のとく顔を琢男付をたしなみ出し傍輩の女共ゐ思ひつかるゝ仕掛今時の女奉公人浮氣がちにて此者が男自慢の鼻に惱をてれ物師は針手のきゝもまゝ

に破れし着物に氣を付て縫まぬにぬふてやり是からふくろぴ初て傍輩もいひ立何どなくいひやまず腰元は運でもくるしからぬ茶を見せにはてびれかしい目付して見せれば食燒のたまたまそれ〳〵に杓子片手に鍋のせんば煎を盛時骨頭を撰て此男にと氣をつければれもしろい事に思ふて男琢ふかゝつて居て肝心のれのれが役目の店の商ひ事いうつゝに勤ける物しで奉公人の女房せんさくを第一ゐして女夫つれゐて宿ばいりする者に立身せしい稀なり我自分に世帶を持たらばかふして口を過きやふといふ胸算用のつもりもなく女房持てはいるを樂とばかり思ひ或は奉公盛りに傍輩の侍女と狂ひつい孕せていやながら何の覚悟もなくて俄に宿持ねばならぬ首尾にて親方の家不首尾にして錢もうけより先へ子をもうけ諸かせぎにする合点の女房は赤子にかゝつて朝夕の食さへ男が搾るやうに成てはあたまから合ぬ算用十露盤のほうげたがちがふへし宿へもていり出世もせふと思ふ者はたとへ傍輩が身の綺羅をかざり旦那同然に衣裳廻りを拵さいぐともそれには氣をうつさず布子の外余所行の晴には花色紬一ッにて世間をすまし給銀を年々溜て十年の年季をつと先一年の禮奉公迄去て親方より相應の望姓をもらひ當分は裏屋をかり手煎トして我手馴し商ひ物を持て出て近付の方へ廻り取付なれば外と御聞合せなされて同し直段ならばれなじみたけに私がを買

と下されませと今迄殿づけにした人に樣を付て小腰をかゞ免是よりそろ〳〵と其商ひの邊筋を踏堅め是では二人三人は過らるゝそと慥に見極免てから店の有表屋をかりちい小者一人つかひゆだんなく拵段々銀をのばし望姓丈夫になつた時器量にかまいず手達者にて少し日記付もするたくましき女房持て下女並に朝夕の喰物も手つだはせ友過の心になつて拵稲になくては借屋の身で家持に成る事はならぬものなり宿ばいりして主人の影にて世間廣ふつとめし甲斐には近付多く最食買にして貰ひ商ひ段々繁昌して爰にて噛しばり辛抱仕ぬけば十貫目が百貫目の高にものぼる程に吹付る仕合の時もふしてやつたと心をもるめ是から世の樂みによい女房をむかへてと問合せて分に過たる人の娘を仲人聟がいひれふせて首尾とゝのひ嫁入すんで傍輩の手代共祝びに來て見れば女房は結搆な小袖かされて膳にすはり箸もえづかにとりて鱠せらず燒物に手もつけずして万たしなみふかく連て來た侍女に茶臺にて茶をとこばせ亭主傍輩共へ引合すれば耻しさふに挨拶して近付成の盃事重り客も亭主も醉てくたまさながら肘枕してうた〳〵ねする我男ばかりに氣をつけ裾へ蒲團させるなど絲た顏して此樣子を見て心うれしく元手の銀より一番に鼻毛を延え商ひに出る日もしばし別れをおしと頭痛がするの日和がすくれぬのとつい一日を内でくらし勤へき旦那の方へも

今日を明日となし氣に成肝心の精出す胴骨に腰折して是より下り坂に成て内證ゆかぬからいふまひ詞もいひつのりて度々の女夫ゐさかひ世間の内儀連は姿作りて春されや東山の櫻見にもゝくにこちは貧乏の花盛色かはむをんでつぼ口して高笑もせざりし口を有程あけてつべ〳〵と男へ口ごたへたまらぬかと手元の十露盤なけ打にすれば三五の十八ばかりとちがふ身代の崩口さん〳〵つゝきの狂言の始り大皷打やぶつて旦那をはしめ世間の人に損をかけて京を夜ぬけに尻に帆かけて西國へ走船うかゞ上るむかしの身には思ひもよらぬ事人の仕合も時至りいきゐひにのりてめつきりと儲けありて間なく金の溜る拍子のよい時節はなを此時をうしなはぬやうに勵み商賣に油斷せねば町所でも人に知らるゝ程の分限には成事ぞかし人間一生の仕合福を得る事は稀にして不仕合なる事は多きものなれば自然と天道に叶ひ得かたき幸を得時にあひよい勢ひにのる時節精を出して勤むへし努々此時を取そづ志たり共又重絲てよき仕合の時あらんと後だのみして油斷ないつもかふしやと胸をすへて著を極め俄に家を買廣けて家作りに物を入花麗なる女房をむかへて樂み仕合の拵迄ゆきつかぬ中に身代しもつる、は其者の覺悟あしき故ぞかしたゝ始末を第一にして仕合の時を待へき人の咨嗟を笑ふ事と非と世盛の時澤山に人に物をやりしとて我身代のならぬ時に至り

もらふた人からさつくものにもあらさればかなゑき時は身一心足てくれる人なければたと
へ虱の皮と當言いはふと始末して人に無心をいとぬやうあすること肝心なれ何程懇なる中
にても銀かしてたもれとはいひにくいものぞかし雲竅口の勝句ふいひにくさゐぞ得にいさ
りけりといふ前句に銀かりにいては煙草にゑふて來ると付しいとゝり貧乏なれて顔の皮厚
く成てさま〳〵の計略をいふてかり出しに歩行人い搭別大抵世間を張てゐるものは少分程
いたれぬものなれといはねば手前にぬきさしのならぬ脇指の鐺がつまり切てせふ事なさに
はふて見るに懇たけの挨拶にさりといい殘念四五日されなればさいはい五百目去隱居のかみ
樣の臍くり銀慥な所あらば密にかしたいと頼まれしを手前にい入用なく先思ひ當りなしと
返事いたしたがもはや四五日も間があればかしてゑまいれたも存せぬ聞て此方から御左右
いたさふといふ人は惡心にて嘘いふにいあらねどすげなふないとにはれぬから補ふていふ
詞なれど借りたい氣にい誠と思ひ今少しはやくいひ出せばよいもの万事此やうに跡遍にゆ
くと心の中にて氣をいたむるものなれば是は大きに殺生な挨拶し只思ひ當りがなくば曾て
ないといひはなしてやれば借る人も又工面する物ぞかし豐なる主にかゝれば不仕合の人の
内證の困みを知ず必旦那の金の光りの威を靈ひ主人の一家口をたれて番頭に少しの銀をか

りたい頼ひ日比の言葉つきとは一調子ひくめて手をついて頼まるゝに儘頭巾其儘に塞劫記
にある油屋の亭主見るやうな顔して日比一門ぶりて我等に大柄なる詞つきこんな所で見せ
つけ幾度も足ばこばせて頼みまするの二百三百もいはせねば重るから我威が強ふならねと
鼻いからし當際は江戸からのぼせ銀のほども存せば畏つたとも申されませぬ先心づもり仕
つて見ましてから御返事申ませふ當にはなされまするな久三こい昨日近江から旦那方へ來
た鴨の毛を引てれけ晩にゑ中間の手代衆を年忘れに身が方へよぶほどに綿の魚屋の又六に
はやふ來て拵へてくれ此中たのんだ三兩の金もてゑらへてれにたゞにに手形書て次手に後
ゐ持て來るやうにいふてこいと主人の一家の無心は聞入ず此者屋の三兩の事をいふもうぬ
が威勢をふるまふありさま大友の眞鳥が番頭ともいふへき勢ひかんゐんなよねど金がかた
きの世の中口にしなから頼みますと言葉をたれて歸りぬすべて大家の重手代は一家出入の
者迄が旦那殿より執玄崇てもてなすゆへに身のほどをわすれ親方を尻にゑさて奢出し心に
あふものには濟さぬ者にてもかしてやりうぬが心にあはぬものは主人の一類内儀の里元か
ゝの少し無心もとり合ず番頭が我儘ゆへに恨ましき主人を怨ゑ親類中睦しからず家久ゑく
出入し者も來ぬやうになつて一ッも其家の爲にならぞ終にい諸所よりいひ立次の手代へ番

頭職わたして自分の世帶を持ぬれども旦那に居た時の調子で暮しける程に間もなく身代の尾を出し稲荷前にて後は土細工の人形を去て賣主の威をかり去高慢の鼻もかけたり土の西行うき世をかこち顔なる我なみだでくらしぬ

○　金銀廻りのよい藥屋の今長者

他國はさらなり京江戸大坂三ヶの津に棟高き有德の町人根生の分限者ばかりにあらず大かたい皆手代の宿ばかり親方の顔にてそれ〳〵の商ひの道をゝぼえ家藥に賢く拵出して大身代と成りあまたの家來を抱其時にあふて旦那樣とよばれ丸頭巾に紫竹の杖替草履をもたせ朝茶湯に行などいつ醫古せし躰も見へねど銀さへあれば何時からも成事ぞかし人手代の成り上りものと嘲するい僻事こたとへ眞野の長者の殞しなと自慢し大職冠から續た筋目あればとて昔の劍今の菜刀にて手づから黑木の小割し運は天に蚊屋と質屋に有ては蚊の喰時の用には立がたしいにしへの系圖だていふ程其身の恥にして零落せし人のいふ事理のせまつたる事でも聞入れる者なくいま迄風呂敷包かたげて旦那の供して歩行たる者今我身上藥て時めく人のいふ事ていずぶん愚成る事にても人皆耳をすまし御尤といふて聞とゞけり然れば奉公人の出世は主の光り暉く我代ともなれり思ひ入て頼みし旦那に無二の奉公をつくし

て銀をもうけてあてがふべし必ず奉公人の癖として大勢ある傍輩の中にすぐれて我一人精出して働ふとづがないと主人の爲に損の行く事も私用あれば見のがし我事にかゝつている者は冥加につきて我世を經し時思ひ知るなり親として我子の性根をしらず主取の吟味してよい所へさへ奉公ゐ出せば立身とばかり思ふは愚なる事ぞかし金銀持丸長者の家につかへても肝心の身を持ッ時博奕色狂ひに幾もなき銀を費し終には主人の物を明ケて親請人に難儀をかけ詫金の出所なく親類町所の世話になり内證隱ひ濟できのふ迄旦那の名代に黑羽二重の小袖着かざり一ッ印籠さげてあぢゝやりし身今日と縕の荷ひ商ひの身の行末幾人か限りなしさかし智者も千慮すれば一失あり愚者も千慮すれば一得ある習ひ龍の駒にも跛といふ事あれば智惠才覺ある者も若き中は一旦仕損じのあるまじきものにてなし其時仕損ひを悔て心ざしを改め勵みて善にうつらばよい人間に成て立身せまじき物にもあらじ脉の上つた病人も匙が廻れば再び本復去て堅固になれる藥の德製法に念を入るから外の生藥屋とは格別繁昌して大坂堺筋に久去き藥種屋銀の廻りよく次第分限と成て諸國に店を出し大勢の手代を抱て手廣く商ひを仕けり子飼の手代助八とて年を重ね藥種の道を知て功者な醫者衆の得見ぬ藥も見分ケ製法の仕樣も流通にゝぼえ重寶なる者と親方もわけて目をかけ毎

年長崎へも買物に下されける万里の海上も船頭乘覺て雲を見定め風波の難を除て今程船路の慥なる事はなく船にい怪我なくけつく平地の角もない丸山の色里に乘込何時知ずの戀風に吹上られて買物の金銀を打込事血氣盛の若い者に金持してやる事は心もとない所ぞかしさかも酒所にて京大坂より下りし若い者共地の上戸と飲あひ其さけんにて助八も丸山へ誘れゆき思ひの外に深入して親方より請取し金子大分仕過し俄に思案すれどたわけつくしてさまふた跡なればせふ事なく同じ宿の手代共はそれ〳〵に唐織伽羅麝種鮫諸道具買て面々に是は慥に上方では何程になるといさむ中になげ首してねるを見かね様子尋ぬれば主人より五百両請取し金子の内二百両黄金の大夫が凱我物にして抱てねし色床の夢が今覺あげ屋の夜食悔てかへらぬ無分別の遊び死ねばならぬ身の果と涙をこぼし語るをさりとは小氣者綴二百兩などですてふとは大商人の家につとめる程にもない氣が狹い殘る三百両で藥種でない何でも恰好の安き物をかひ直付を高く二百兩の仕過しを買物の代へもりかけ主人の手前へ算用たて元直にもやかぬ時は其方が目利違と當分叱られてすむ事身共等も下りてたゞいねぬ集錢出しの夏の料理庭鳥の時々は丸山へも出かけ相應に金つゝのひこなぞ買物の直で入れ合せて今日迄親方に尻を見せず毎年下り海路の憂を忘れ樂む事なり此調錬がいやなら

何の思案もない殘り三百兩を持て爰から直に欠落してよい時分に親の所へひそかに歸り次第を咄しで親請人諸道具を賣立て是程迄拵ましたと三百兩の内百両請人にもたせ十度程主の門へ手をつかすればすむ事案じずと酒のめと惡智惠をつくれど助八是にのらず買たる代物の直段へもりかけ主人の眼を掠る事斷なしに旦那の金を悪所へつかふさへあるに其上にまた目をぬく事いかにしても天道恐ろし又三百兩取て欠落まて百兩で詫る事も邪の上の邪兎角若氣の至りにてつかひ捨しと立歸り親方へ有のまゝに白狀し三百兩の殘り金を渡して其上は天道次第是とらるれば二百兩の代に命を主人へ上たと思へば冥途にても氣がさつはりとまてよまと分別極めて三百兩の金を大事にかけ大坂へ歸る手代と同船して路金なけれど三百兩の金に手は付ず人の投害に成て難波へ歸り主人の家へは敷居高く請人の方へ行傍輩をよびよせ次第を語り三百兩を親方へかへしいかやう共此上は御主人の淹存分になされ下されとよろしう申上て給はれといふてもどせば主人聞れて尤日比の奉公ぶりよく一ト器量ある奴なれば末々にては二百兩三百兩は元手にもとふすべきと内々思ふてはゐたれ共長崎にて丸山狂ひに仕過せし金なれば一錢も用捨はならぬ其身は勿論請人共にありたけの物を賣立テさせて二百兩をとらねばかぬむこいとばし思ふなはや來年から助八

めが替りにとの手代でも又長崎へ買物に下さねばならず然れば今助八が丸山の仕過しを行せにくてすませば今からつのとす手代と二百兩迄仕過しをた分では助八過りに事が濟と悪い事の定規にせられ下を程の手代共段々仕損しすべし大分の金をもたせ數百里わなたへつかはし京大坂に増た丸山といふ名所あればさびしうせねば親方がついて行身ではなし安堵仕がたを力一ぱいありたけの物を買ろうして金を持て參れと日比了簡がちなる主人中ゝするぞくいひ渡さるれば助八親是非なく妹娘と遊女町へ奉公に出して五十兩といふ金に諸道具賣立て我も裸に成て以上六十兩にて漸く詫れふせ先すんで嬉しいと微塵も難儀なる顔もせず増て助八をふとゞきなとしかりもせねば向ひの姨が來て是程に親に難儀をかける助八を叱りもせられぬ甘親故とんな仕損ひをする今からせぬやうに急度折檻めされといへばこりや助八が仕そこなひしやない身共が仕そこないから此目にあふと思へば悴子をしからふはづがない此者を奉公に出す時知音近付を頼みし故あちこちから奉公の口をいふてきたれど箱屋じやの鍛冶屋をやのたばこやのと主撰して手代衆が多い所じやといやがる奴をむりに今のさぐずりやへやつたは有德人と見込末の出世の事のみに目がつき金銀澤山な中におかば自然とおのれが自由にして仕損じせふと思ふ所へ氣がつかぬ所が親の誤り今思へば

金銀のちろばはぬ職人の所へつかはしなば仕過ししたとて錢五貫か七貫の事であるべきに名作の刀の疵は療治むつかゝ小刀疵は煙卿にてもなをる文珠四州へ智恵付けに弟子にやつたら今の難儀はせまい物我此屋敷を家守して年中の宿賃をゆるさるゝ代りに町儀長屋の世話をやきて大裏にある桃の木柿の木毎年さかりには家主殿へしんせて跡は我物顔にねんごろな人のかたへもつかはし妻子にも飽程喰せしが是皆家主の木にて我物には成ねど澤山にあれはおのづから我しらずにすると同じ事で金銀多き中あれば桃柿の如くつい私の事につかふ道理奉公に出す時さきの主撰をより手前の悴子が性根を見定ぬ親のおもひからの今の難儀なれば此書と思ふて悴子を叱もせぬといふを助八聞て胸に釘打る、より苦しく書置殘し長崎へ下り浦五嶋町の以前の宿を頼み縞の裏屋をかり十禪寺の日雇中間、はいり唐人の小遣ひにやとはれ上方衆の小用取り身を捨て働き少し金も溜りまそつと出來たら木香縮砂の買置しで思入を合せて悦びの秋船をまつ折柄相借屋の噂が助八殿ちと目がかりたいと釣佛壇の下から書た物を出しわしが娘丸山につとめして此春平が明て歸り今一奉公して金を溜母を樂に養ふて呉ふとて跡の月下の關へ又遊女奉公に行ます時丸山で近い頃地の客に逢た時床の中に此書た物が落て有て座つたら進上と待てゐれど夫ゝら見へぬ故に紙

入に入れて置まゑた若尋に來たらやつて下されと云でれはて行しが何が書てあるとと思ひ長屋の衆に見せてもこちの寺にない字じやといふて讀手がござらぬこなたは才覺な人で物もか、しやりさふなよんで聞まて下されとさし出すを披きて見れば

唐鄭相國元和年中訶陵國の商主李摩訶云者請而密令傳授名方也破故紙十兩胡挑廿兩細末して蜜にて煉藥とす氣を益心を快ゑ目を明に筋骨を補ひ腎を固す至極の妙方秘すべし〳〵

とあり元來藥の道は鍛煉の助八見ゐ是天の與と心中に悅びけるが態身震して恐やこりや切死丹の寺請狀ゑや捨さつしやれと云ばなふいまわしやちやつと火ゐくべて下されと云ば穢はしい火にくべふゐ川へ流て進せふと取て歸り藥搾唐八から内緣有て貰ひましたと老八嘘人にのまえて見るに格別健に成て是はきめうの藥と聞傳へる後と銀をつゝんで所望に來ればさあ金の緒に取付たとそれより御江戸へ下り補益万德丹と金看板出ゑげるに一度買たる人其功能のすぐれたるを評判して段ゝ弘り次第に富貴に成て一万兩の身代と八の指圖にちがとぬ内證今こそと長崎にて遣ひ捨し親方の金二百兩に絹綿の土産こしらへ大坂の古主へつうし齟齬にてのぼり段々の斷をのべ二百兩に今年迄の利をそへて返納し在所へもさ

て二親にふたゝひ對面し我ゆへに遊女町へ身を賣し妹を請出し一所に江戸へ伴ひ歸り兩親を隱居させ妹を相應の所へ緣に付け猶仕合の柏子よく金銀納る万德丹功能の見る驚昌の店

○合力の銀手形かいたか惡い疱瘡の面

岷江始は艙を濫へ楚に入て則底なしとかや細き事とて小商ひに退屈し大がゝりにして大海へ乘出し大欲の風に身代の船を覆して一度に大水を飲ものぞかし世間の銀持も始は細き事なり段々積上けて分限者とはなれりかならず氣を屈せず仕似せの店を替ずにたまかにしてゆくべし武州堺丁の邊に繩の錢みせを出し芝居見物の札錢を賣けるに銀二匁三匁の中にて二リン三リンの懸込を見て少しの事なから積れば大分の利を得て少々のもとでも出來ければいつとなく兩替屋と成て諸國より入込人々立寄る隙なく明方より暮方迄繩の銀子とり崩げて丁銀こまがねに替小判を大豆板に替て天秤秤にひまなくかけ出し毎日〳〵積りて十年たゝぬ中に本兩替の中間へ入手代おまた抱て手廣に出入をしけり此兩替の亭主の生國は伊勢の古市にて以前玉川千之丞といへる女形の名人風俗物でし正眞の女に髮の毛の三筋たらぬと猿若勘三郎しばゐにて見る人目を悅しめ誠ゑ郡女郎に面影の通小町の狂言に雨の日も風の日も增て日和には人の山をなしてはやりぬ千之丞生れも勢州にて藝子にならぬ

惡腕せし凡夫の時鬼の來ぬ間草履なげの友達にてありしを思ひ出して江戸へ扶に行く思ひ立の打着所の當所にして千之丞方へ下り着むかしを語りてさばらく此宿に足をとゞめそれから此堺丁に九尺間の店をかりて拵出し今中間商ひの上盛といなりぬ生國なれば家名を伊勢嶋屋の古石工門と名のり次第に分限になりて昔の木綿布子も時代とて上下共に飛弾紬に着替芝看もそれ〳〵に喰覓物見遊山談義參りに日をくらし夜い將碁友達をあつめてたのしめり子共二人惣領と市九郎とて若けれ共色狂ひせず近所のむす子共の手本共成るほどの生れ付なれ共大氣ゐして小判市に氣象を出し血氣にはやりぬれば思はぬ損をして身代の障りにもならんかと是のみ親父の案じ色々そ替れ子を持て親の身にて世話のない者はなし次いおぎんとて京にも稀な美形の娘今何にふ足なき身上なれば町人の中にてもすぐれて人に知られたる有德人のむす子を聟にと聞合すれど昔玉川といふえばゐ者にかくまはれゐたりしを野郎の草履取金剛の果のやうに風聞して身を持たる人と嫁にとらずはしがる方と身代釣しとて取合ず十七迄ひとりねをさせて若い手代の多き内に盛立たる娘をかゝへて二親の氣遣ひがり兄が小判市にかゝるよりは心の休まる間もなく氣を付けてついて廻りの番頭金石工門とて無替中間でも手を置く程の利發者身を慎み商買にゆだんなく勤めければ主人より第

一此手代をのゞ込諸方方銀を預け店は此男獨で拵た伊勢島屋と同ゑ中間の根生の兩替富藏屋の德入とて代々富貴にして所で名を知られたる分限者德太郎といへる子を持ける一人もひとりからと發明にして親の氣を助け諸人の讃られ者親の身にしてハ一入嬉ゑかりさ十九の時通り町の筋目よき町人の娘を見立てし嫁にとり此上に思ひ殘せゑ事もなく面屋をもつり万づの鍵を德太郎に渡し店は番頭惣助に後見させ隣屋敷へ二親共に隱居せられけり此惣助主思ひの實躰者宿へもはいるべき年なれ共若代を大事にれもひ妻も持ず宿も拵ずして然も商賣の道鍛煉し古き事知の手代なれば中間の若い者共も親父〳〵と用ひぬ小判市も此男が買出せば俄に上り賣出せば急に下り口になれりれのづから此番頭の口を窺ひ旦那よりはがき、富藏屋の白鼠の忠の者と内外共ゐ稱美する惣助が若旦那を引き廻せば慥成る兩替店鬼に金持せ根强き事かくれなゑ德太郎夫婦ゐひのよき事をふたりの親限りなく悅び此上に孫の顏見る事を願はれしに程なく懷妊日を算月を繰產れぬさきの乳媼をさだめ鶏鶏のつきし小袖を拵へ待れしに當り月に安く男子出生限りなき悅ひ十分過て產後重く七十五日の中にをしむべき十七の盛の春花嫁い無常の風に散て果られ男姑のなげきいふばかりなし形見に殘るひとりの孫を隱居へ取て髮の壓きやうにと岩松と名をよび祖父祖母の寵愛荒ゐ

風にもあてぬやうに養育せられぬ若代の德太郎ふたり寢し夜の枕さびしく過ゆかれし妻の事のを思ひこがれて氣分もすぐれず色顏もあをかうねば番頭惣助氣遣ひがり若き人の病氣がりし仕出しと傍輩の中にて物馴たる手代を密によび若旦那此間のは容躰奥方の別れを悲しみ愁より御心そぐれぬと見ゆれば堺丁木挽町の芝若へつれまして御心をなぐさめられ藝子の方へも誘引あつてとかく憂鬱散なさるゝやうに少々金の入る分と我等が合点なれば深入り遊ばさぬやうに棍をとつて冲漕ださぎのないやうに見はからひが弟一なりかならずゆかふと仰られふとよし原などへは決して無用三野へ若いむす子達をやるは貧乏神の社へ願かけに參らずやうなものじやぞと內證にて小判五十兩取出し是若旦那の藝代じや細長ふ始末して慰められよと渡しければ手代宇兵衛のみ込て金子請取出ともむながらるゝ若旦那を不食の病人ゐ弼なこめるやうにいふて市村竹之丞をばゐを見せ囃子方の役者に近付きあつて是を招き呼ければ何が事がな笛吹の吉平万つ我等に任せと請込其座の大夫方へ御供申て參りしより役者程氣散玄に興有るれもしろいものはないと思ひ初られしより後は付てくる手代にもかくし繁く遊びに出られける折ふし番頭惣助中風心にて半身かなひがたき煩ひ臥居れどろかれ此男を殺しては店の眞柱を拔に同じと歴〻の名醫達に見せられけるに

有馬の温泉に增したるものあらじと通し駕籠を仕立て末の手代兩人迄付て入湯の爲上方へのぼされ內に恐るゝ者なければ德太郎是ゐ高なしに費なる金をつかひ出ゑ一と芝居の座中の子共立役どの參會に客の山をうがかゑ何れものうれしがる程のさいぎ手代と慈き密に思見すれ共肝心の恐がらるゝ番頭が留主なれば殘りの若い者がいふ事いかな〳〵歸に郭公さかるゝ物でなく世間は霜月師走どていそがしがる時分ゐ店の取引もかをはずふびんがらるゝ、大夫方へもかれしに常と替りて物案じ姿思はせぶりかと德太大臣もすこし怒氣の顏色を見て臺所賄の彌平次能出是程內外御懇意に成れ下さる、旦那へ遠慮ぶかい大夫にて申上ずに心にばかり存じてゐられをす故に氣分に顯はれ御ふしんの御氣色有樣い太夫本と銀元と間違出來ゐたし手前の大夫に限らず一座の役者衆へ當暮の給金が渡りをせぬ故に小氣な大夫でそれを今から苦にいたされをしてと問藥もりかけければ夫は大夫遠慮深いまだ我等に心置ゐふかぞれ程の事ゑと聞るれば彌平次扨こそしてやつたと手をつき八十五兩と申上れば夫は安い節季の入用世は夫〻の風が當る年玉の扇子さへ六百目にてはたりぐるし八十五兩は我等が方の着屋の拂よりはすくなし月末になれば手前も高賃の取やりしげくやかをしければ明後五日の壹前に店へきて前藤こゝへもきた手代の宇兵衛より此手形にて請取

れ旦那が手を見知てゐれば相違なく渡すぞと審判すへて下さりけるかたじけなしと大夫喜
花に水うちしごとく生々と成て此手形を四五度六七度にしいたゞき悦ぶ所へ御子息嘉兵衛の
ぼ廚遊のはとれり殊の外むづかしとけそしく伊宿からの使是は歸らねばならぬと出た盃さ
へとり上ず歸られければ脇にて大夫を始家内の者共打より彼手形を取廻し是が八十五兩に
なる御書判見た所は別の事もなふてかゝ歴々金持の御判は思ひなしかふくらかな所が其儘
金袋のやうに福々としたゆ墨色と延紙二枚かさねは安包にして大事にがけ神前へ上て神酒
備へ燈明ともし大夫拍手など打て三拜し諸願成就大臣息災延命敬白

○　祝言の礫打堅めた阿家の身代

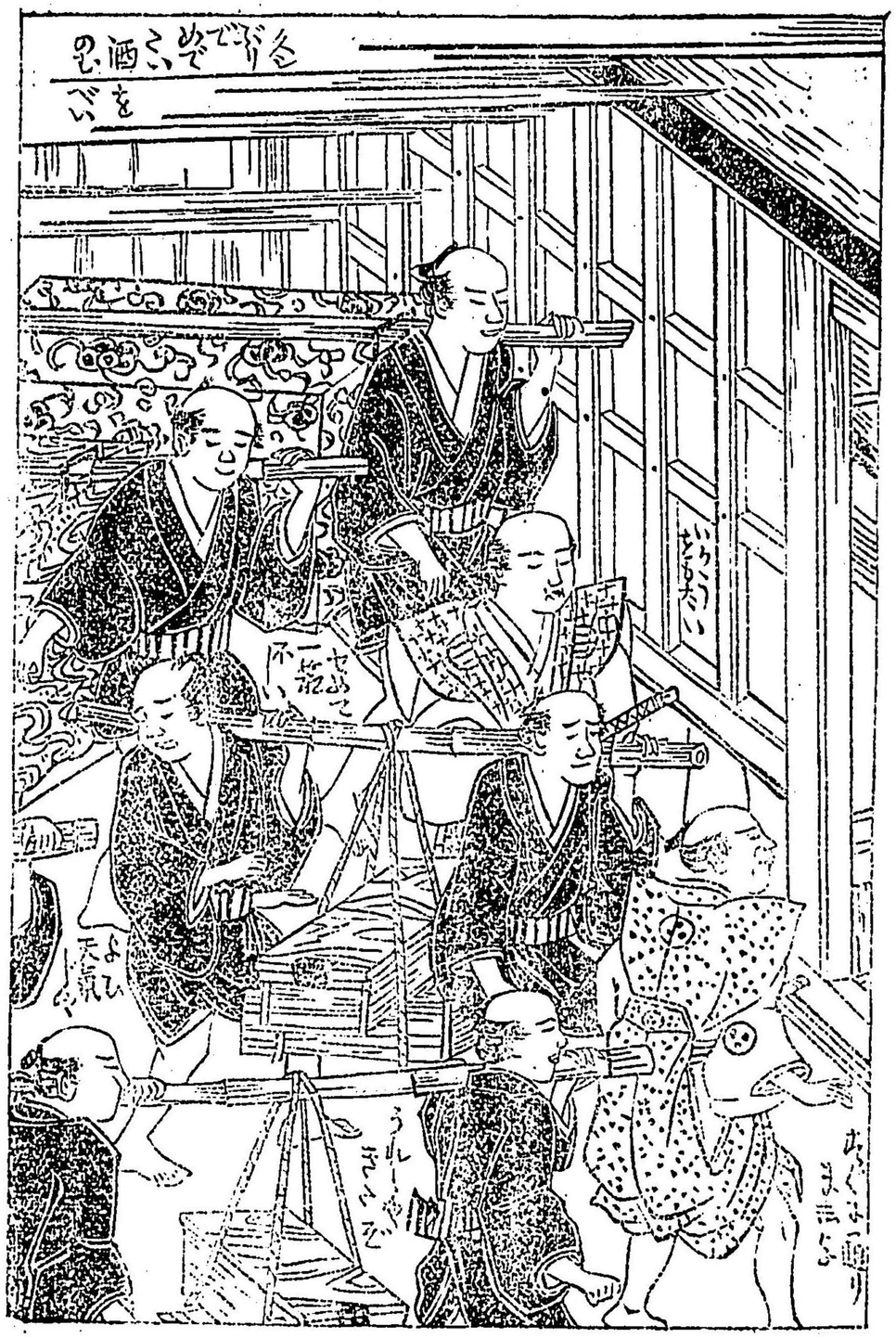
若むす子の色狂ひと小兒の廚遊は輕いか重いか一度は渡る川にて浮世の瀬をこさねばなら
ず富藏屋隱居の秘藏孫廚遊のゐとれりとて一家衆面屋へ見舞につめかけ小兒醫者の功者成
を夜中に緣を求めて頼みにつかとし上を下へと家内はにへかへる所へ德太郎やう〳〵歸れ
ば隱居にが〳〵しい顔して諸藝の稽古もよきほど有べし藝者には成まじ夜に入迄精を出す
事且い家業の妨共成べしと惣子遊ひに尻からぬけぬ事も知れぬ親父い佛神々樣へ祈願か
けて孫が出物輕かれといのられける日比出入の心安き醫者早速見まはれ小兒の容躰を見て

出物の紫だろふる所あれば先毒消に金をせんじて進せられよとあればむと一家衆それ藥鍋
よと水改めで下を燒立させ小判一兩といへど手代共返事もせず兩替の店に小判がないとは
一歩成り共出せといふ丁銀錢は所柵にあれど金氣といふ物いいかな〳〵なかりき隱居大き
にをどろかれ一万兩渡して隣へ隱居せしいはまだ十年にはならずがてんが行ぬと手代共を
よびつけ孫の事は脇へなりて今夜の中に勘定して見せよとゐめき出さるなば手代宇兵衛能
出番頭惣助歸られなば相談はたし御耳へも入れ申さんと存せし内にかくの仕合近年德太郎
殿遊山所へ費なる金銀をまきすてうるゝによつて我々共内證にて段々御異見申上れど御聞
入れなく御身代半分は大かた明させられたと存ると身の一ぶんのいひわけながらに打明て
いひければ聞る、と隱居即座に目を眩されしをやう〳〵よびいけ氣つけなど參らす所へ番
頭惣助湯治相應し養生がてらに兼ての念願留主の中に店の亂れん事も知ず西國順禮四國編
路をめぐり上がたに一年余り逗留思の如く堅固ゐ成て行し時とはちがひ駕籠にものらず道
中無事に歩行て歸り此御子を見て何事かと驚けば隱居氣がつき惣助かよい所へ歸つた德太
郎め幷に手代字兵衛めを今宵の中に勘當去てた、き出すと以の外腹立惣助いよ〳〵膽をつ
ぶ去先私に御任せ成れて御心をしづめられ御隱居へ御歸り遊ばし今夜はゆるりと御休み有

べしと色々宥て先隱居へかへさまし扨手代分の者に尋ねては互に傍罪の身の上隱さあひて留守中の品まつすゞにはいふまじとがてん去心慮なさでつち共を呼つけて我留りの中の樣子を聞に若旦那は一夜も内にゝさらす宇兵衛殿と三野の女郎とやらを請出して近い所にかふておかしやる作兵衛殿は晝から出て初夜過にもどつて酒さげんの上調子で三味線琴古八兵衛殿は賭双六打ゐ行るゝやら毎夜さ寐を持て出ていつも歸りは夜明け時分嘉六殿と吉平殿は町人のいらぬ事と思へど兵法ならひにゆかれ木刀品柄こしらへ日が暮ると勘定場で受つながしつ質蔵に來た婆々をたゝいて詫言たら〳〵久七半助はどこで錢を取てれトやるやら蛤のぬき身を肴にして伊丹鴻の池の下り酒を四度づゝ買て來てのまれますとまだ年の行ぬでつち共あたりざはどもかまはずありの儘に家内の樣子を咄せば惣助も家をれり誠に主なき家には狐梟やうの物住といふが若旦那一人夜遊ひに出らるゝゆへに手代共殘らず主なしの如くに成て濫行なる爲体此躰ならば金銀の出入やくたいは有まじと夜中ねずに幅面共見て宇兵衛を招き責付けて勘定を聞て見るに手金いやう〳〵千兩斗見へて借り口二百貫目余あり是はどふも分別にあたゝぬと色々思案してしらりと夜をあかせば隱居は目も合ず烏が啼と隣より來て德太郎めを引ずり出せ名主五人組へ披露ゑて勘當してのけるとて以

高にいはるゝを先與へとつれまして入り通ひ口のふすまをたて切り主從ひたひをよせて惣助小聲にて申すゆは渡ゑ成れし金子は千兩計に成て他借二百貫目余指引して見れば百三四十貫目の借口今若旦那を放埒なと仰られて勘當をなされたら預けし銀主共れぱつかながめて急に一軒から戻せと申出したら聞つれへに殘らず催促致すべし然る時と急に潰俄に表へ暖簾かけねばならぬ昔尾代々名高い両替の株もづか百四五十貫目にて潰さん事はかにしても殘念に存じますれば腹が立ふと御堪忍なされて先常のとぼりに若旦那へもれわしらひ私内證で急度御異見仕らん扨ゆ隱居のれ金は何程ござり升面屋へれかしなされて下さりませといへば二千兩以て隱居せしが旦那寺の本堂から方丈をたてなをさる、普信の入用に五十貫目取替奉加にあつまり次第返辨のえづなれば急な間にてあふまい其外は念佛講中の衆へもれこれへかし物ぬひのさはが親の所へもといひかねらるゝ幾年に成てもやめられぬか此道とがてんして根をふしても問ず先それなれば御隱居金も二三百兩ならでいない御樣子申迄えなけれども爰が大事の瀬戸なれば殘りの手代どもにもふとゞきあれ共かならず其色め遊ばしまそな何とぞ勘辨いたして此節手を見せぬ工面をして見中さんと枕をあつて工夫し幸の事を存じつけたり堺丁の伊勢島屋の番頭金右工門と私は日比兄弟はどのねんご

ぶあんハあるまいが
さいとひのおもひ付
でふハふんとあろぞ
ぢさいさでござる


多くめでぶり
の酒さい
べいを
いろうたい
セふて
一筋
不い
よひ
天気
うーレーぶ
ぢゃ
ぶくちゃ
ぶ

ろ互の大事の場は内證にて讀合し助相べしと内々からの契約殊に金右工門親方と近年の仕出し分限今兩替中間にて一二番切りの丈夫な身上れり入て頼みなば百二百はどのやうにも才覺致して呉中さん先伊勢島屋へ參りひそかに内談仕りて見せませふといふ所へ手代金右衛門惣助無事に有馬より歸宅いたされしよし悦びに耐つた内にかとへば其通りでつち奥へいひ通ずる是はよい所へ先樣ささがよくと悦び隠居を隣へ歸し金右工門を奥へ呼入れてあへば互あ一年余りあいぬあいだの積る咄の中に吸物出し酒四五盃のんでの上金右工門酌するでつちに爰にと給仕は入らぬ用があらば呼べし間鍋そこにれいて勝手へゆきやといへば惣助も察談の下心あれば金右は心安い手酌で呑あふ程に表の用をさけと勝手へやりてさあ〳〵もるりと〳〵と打つくろいで手前の歸を咄し出さんとそるに金右小聲に成て貴殿謡後からの歸りを待兼た子細と手前のむす子娘身共にかくし數度の小判市の損金大分にて他所ゟ入込の銀多く中間でも伊勢島屋のむす子が小判市て大きな損したげなと風聞是が第一兩替商の害惣じて兩替と芝居は世間の評判次第で繁昌もする倒もするひよつと此小判市の評判預けられた銀主方の耳へ入て入用じやといふて取に來たとき一口手を見せるがさいどもう店へ暖簾と出ねばならぬそれゆへ日比其方と申合せたはこゝじや二千兩ばかり此評判の

336903

さずむ迄用意金に入てたもるまいかと金右衛門に先ん手を打かけられて惣助むな算用の十露盤のはうげたをくひちがはしとむねをついて返答も出ざりしがしばらくしてありやうは今そちへ行所じや身共か留主に若旦那遊興に大分金を仕失なはれ大將の行儀をだれしもへ諸手代面〻算用なくに遊びに出是よりの私欲見せの金銀亂亡取のやうに帳面のからくりの仕かけ上方の竹田が細工もはだし其糸の切れめの所をそなたへ内談にゆくがてん去や時こそあれそちもこちもいひ合せやうな絶妙の場たのみの弦もきれてあてがちがふたがなんと面〻の親方の店を引請て支配する我〻今繰な事で暖籠かけるは口れしうは思やらぬかそなたも身共も中間では白鼠の忠臣のといはれて動てゐる中に旦那の家をつぶしてはもはや一生人あ顔とむけられぬと涙ぐみていへば金右も横手打て兩家の滅すべき時節到來是非もなくどふぞ此鳴門を漕ぬけるよゝ思案はあるまいかと兩人手をくみひたひに皺よせ烏帽子着ぬ猿丸太夫のやうなかはして互に工夫し金右衛門いひけるは兩替は沖行く船のごとく損したの博奕打たの悪所ぐるひしたのと悪ゝ評判のあやかしがつくと揖を取ても店の擢が廻らずついに身上の船をするは極つた事八にして預かつて下されといふを七なら廻してしんせふ廿貫目や三十貫のいした銀と世話でござるといふ所へ持かけて預けたがるちと歩の高い

銀をかり出すときのふたのみますと預けに來た人けふは急な入用と俄に取戻しに來るは大事の金銀を手放し半枚程の紙にかいた物にして持てゐる事なれば聞合せて日和を見るいとはりなりしかれば我等の思案にい手前の旦那の娘器量十人なみにすぐれた容儀なれど以前親方御當地へ伊勢かゝかせぎにきたられし節便るべき所なくしばらく玉川千之亟といふ歌舞妓役者の方にかゝつてゐられしを世間で野郎の金剛のやうに評判して是故に筋目ある棟高い家から嫁によばす今年すでに十八こなたの嫁御も二三年以前に產にて紀果成れ旦那に奥がたもなければ筋目よき根生の分限者を聟ふ取たき爲に歌銀百貫目に道具の拵だい千兩つけてこなたへよゑいりさせますと披露ゑて十貫目入十箱の中へ石瓦を入れさゑになひふして長持簞笥の跡から白昼につかはゑ嫁御の乘物先へ道具代千兩箱をこゑらへていかゑしう持せて遣しなばこなたへ八百六十貫目現銀に入とさたし此方へ百六十貫目娘につけてやつてもいたまぬ身上と世間にて評判いたしたら兩家共に人の思入慥に成ていやが上に廻してくれと金銀を預けに參り此間日和見てゐる衆も安堵して其まゝ置てくれといふと知た事と思ふがそなたにも此思案何と思はるゝぞと智惠のそこを震ふて錬出しければ惣助居たる所をねぼへず立て小踊し文珠〳〵と悦び兩方の親方へ呑こませ談合ゑめて吉日撰み契約の敷銀十箱青竹にてそろへの大男紺の大なしに紺の股引脚絆一樣にさしになひにして麻上下着せし手代先へ立て神事のねりものゝごとく富觀屋へさんざゑかして舁込其明の夜嫁入乘物光りかゝやく千兩箱往來の人立とまりてどれからどれへの婚禮ぞと兩方の家名を聞てばつと此さたひろまり人の心はうつろひやすく是よりたしか成身上と評判して二の足ふんだ人々も丈夫に思ひ込て兩家へいやといふを無理に持はこびて預け双方の身代持なをしつゐに表へあらはさずゐむかしにまさる內證となりしもひとへに兩人の手代が働き忠心の智惠袋に納る金銀光りかゝやく家の寶持傳へて子々孫々迄榮へ久しき手代の淳こそ目出たけれ

享保十五庚戌年正月吉日

世間手代氣質終

名著集自第一卷至二十四卷目次

第一卷

復讐月氷奇縁　完　曲亭馬琴著
小春治兵衛花廼島臺　完　松亭金水著

第二卷

碗久松山柳巷話說　完　曲亭馬琴著
大津土産吃又平名畫助刀　完　式亭三馬著
邂逅物語　完　天歩子著
湘中八雄傳　完　北壺游著

第三卷

吾妻餘五郎雙蝶記　完　山東京傳著
淺間ヶ嶽面影草紙　完　柳亭種彦著

第四卷

淺間ヶ嶽后編逢州執著譚　完　柳亭種彦著
怪談雨夜の鐘　完　十返舍一九著
夕霧昔替文章　完　栗杖亭鬼卵著

第五卷

艶郎通覽　完　洞羅山人著
貞操美談園の花　完　爲永春水著

第六卷

恩愛二葉草　完　鼻山人著

小夜の中山石盲遺櫻　完　曲亭馬琴著

第七卷

飛彈匠物語　完　六樹園著
邯鄲諸國物語近江の卷　完　柳亭種彦著
五色の糸　羽の卷　完　峨眉山人著

第八卷

三十三間堂棟材奇傳柳の糸　完　小枝繁著
花暦封じ文　完　雛月亭有人著

第九卷

新累解脫物語　完　曲亭馬琴著
於三幕平宗傳暦　完　ちぬ平魚著

第十卷

邯鄲諸國物語大和卷　完　柳亭種彦著
胸算用（大晦日八一日千金）　完　井原西鶴著

第十一卷

昔語稲妻表紙　完　山東京傳著
姫萬兩長者廼鉢木　完　曲亭馬琴著

第十二卷

糸櫻春蝶奇縁　完　曲亭馬琴著

●第十三卷
邯鄲諸國物語播磨卷　完　柳亭種彦著

記錄曾我女黑舟　完　江島屋其碩八文字屋自笑著

●第十四卷
蹇廼復讐戀の宇喜身玉箒子　完　松亭金水著　義端著

●第十五卷
邯鄲諸國物語伊勢の卷　完　笠亭仙果著
邯鄲諸國物語遠江の卷　完　笠亭仙果著
怪談登志男　完　戀雪舍素及子著

●第十六卷
佐野常世物語　完　曲亭馬琴著
小說浮牡丹全傳　完　山東京傳著
痴漢三人傳　完　歌和亭鬼武著

●第十七卷
俊德麻呂謠曲演義繪本連理の片袖　完　振鷺亭著

●第十八卷
紱手摺昔水偶異國奇談和荘兵衛　完　柳亭種彦著

●第十九卷
常夏双紙　完　曲亭馬琴著
櫻姫曙双紙　完　山東京傳著

●第二十卷
忠臣水滸傳　完　山東京傳著

●第廿一卷
大晦日曙草紙　完　山東京傳著
化競丑滿の鐘　完　曲亭馬琴著

●第廿二卷
已憲鏡　完　式亭三馬著
三七全傳楠柯夢　完　曲亭馬琴著

●第廿三卷
孝子嫩物語　完　高井蘭山著
春色淀の曙　完　松亭金水著

●第廿四卷
菊の井草紙　完　爲永春水著
會稽松の雪　完　峨洋堂著

但シ壹冊定價金五錢全部廿四冊代價金壹圓但シ壹冊ニ付郵稅金貳錢ヅヽ

發行所

礫川出版會社

溫古小說發行目次

高砂大島臺　其碩自笑著　正價金五錢
世間手代氣質　其碩著　正價金五錢
慶德五葉松　其碩瑞笑著　正價金五錢
女非人綴錦　自笑其笑著　正價金五錢
武道近江八景　其碩著　正價金五錢
出世擂虎背物語　自笑其碩著　正價金五錢
那智御山手管瀧　其碩自笑著　正價金五錢

珍術器粟散國　其鳳著　正價金五錢
元祿太平記　梅園堂著　正價金五錢
咲分五人娘　其碩著　正價金五錢
熊谷女編笠　錦文濟著　正價金五錢
風流菊水卷　其樂齊著　正價金五錢
俄仙人戲盲日記　閑鶏齊著　正價金五錢
彩色歌相撲　北笑瞞笑著　正價金五錢

明治二十五年二月九日印刷出版

編輯者　故其碩、

飜刻兼發行者　足立庚吉
東京市小石川區指ヶ谷町十七番地

印刷者　小林由造
東京市小石川區掃除町三十三番地

發行所　小石川區掃除町三十三番地　礫川出版會社

關西販賣所　大坂市心齋橋北詰　競爭屋本店

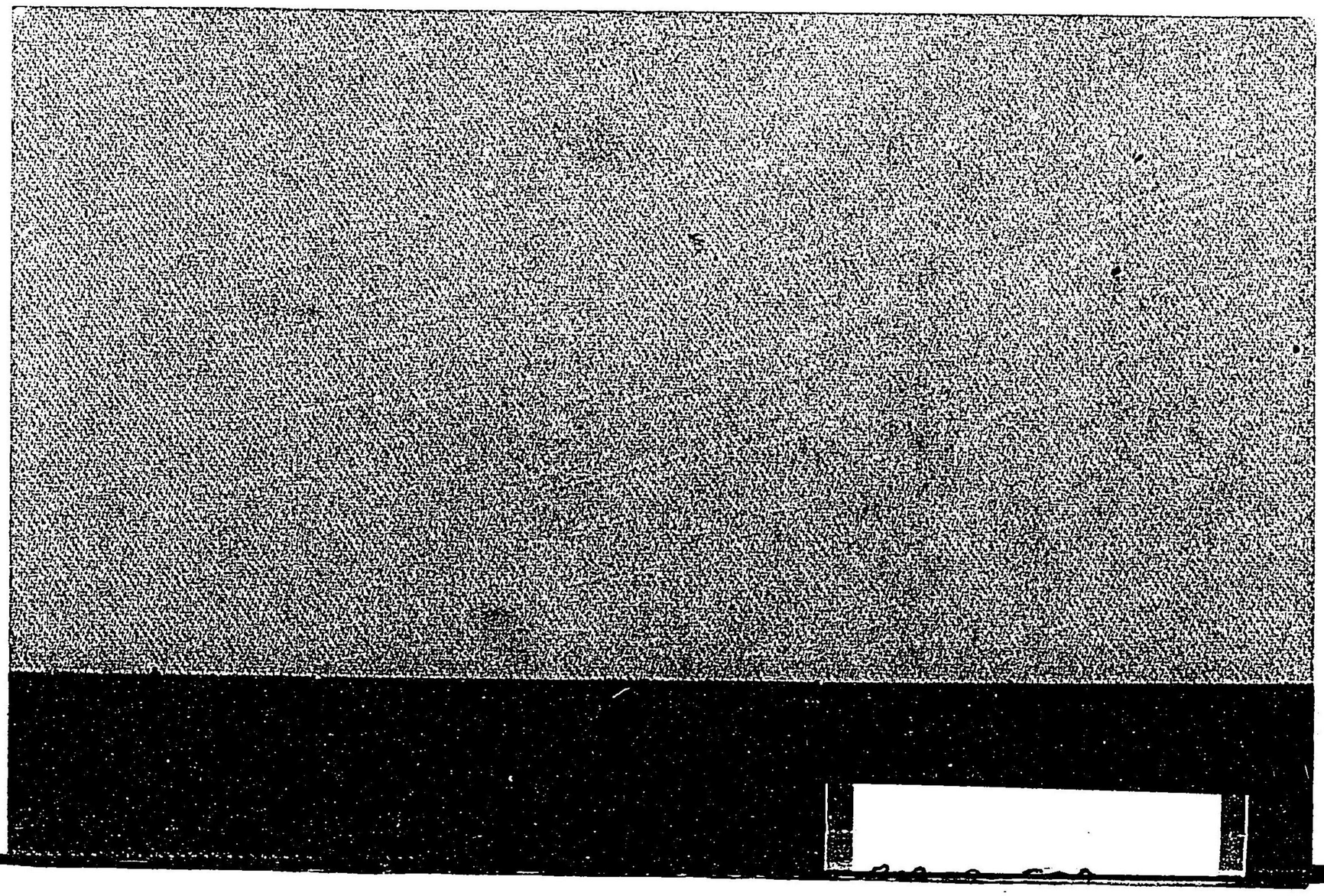
大販賣所

日本橋區本石町二丁目　上田屋本店
神田區裏神保町　上田屋支店
淺草區三好町　大川屋書店
日本橋區通四丁目　金櫻堂書店
神田區錦町一丁目　武藏屋書店
本郷區元富士町　解明堂

東京區尾張町　東海道雜誌店
日本橋區小網町　信文堂雜誌店
京橋區彈左衛門町　巖々堂雜誌店
日本橋區鍜冶町　指金堂雜誌店
神田區錦町三丁目三番地　井上藤吉

右之外日本全國各書林雜誌店ニ於テ取次販賣仕候

874
10



913.52
E98s

089442-000-9

913. 52-E98s

世間手代気質

江島屋 其磯／著

M25

DBM-1146